付篇Ⅰ

# 山口大学吉田構内遺跡保存地区の発掘調査(昭和59年度)

河　村　吉　行

## 1　調査の経過

遺跡保存地区は吉田構内の南西部、サッカー場と第一学生食堂間に位置し、約2000m²の指定地内に弥生時代中期から古墳時代前期にかけての竪穴住居跡21棟が現地保存されている。発掘調査の経緯は先の年報で詳述しており[1)]、本稿ではその概要を記すにとどめる。

大学統合移転に伴う諸工事の進行する昭和41年、遺跡保存地区の東に隣接する第一学生食堂敷地内で弥生時代中期の土器が出土した。これを受けて、昭和42年に組織された吉田遺跡調査団は、サッカー場・ラグビー場予定地で遺構・遺物包含層の範囲確認調査を実施した。その結果、当該地域から弥生時代中期～古墳時代前期の竪穴住居跡が多数検出され、住居および集落の変遷が把握できる、良好な分布状態を示していることから、「遺跡保存地区」として現地保存された。しかしその後、吉田遺跡調査団は統合移転諸工事への対応に忙殺され、遺跡保存地区全域の発掘調査は容易に実施できない状態であった。

昭和56年度以降、遺跡保存地区と一連の集落であったと考えられる同時期の竪穴住居跡が周辺でも検出され、遺跡保存地区の重要性が再確認された。しかし遺跡保存地区内の各竪穴住居跡の個別具体的な資料がほとんどなく、吉田構内はもとより周辺の諸遺跡との比較・検討作業を進める上で大きな障害となっていた。また遺跡保存地区で検出されている竪穴住居群は、吉田構内での弥生時代以降の集落像を明らかにするための不可欠なモデルであり、環境整備を進める上からも発掘調査による具体的な資料収集が必要であるとの判断から、昭和57年度以降、3ヵ年にわたって発掘調査を実施することとなった。

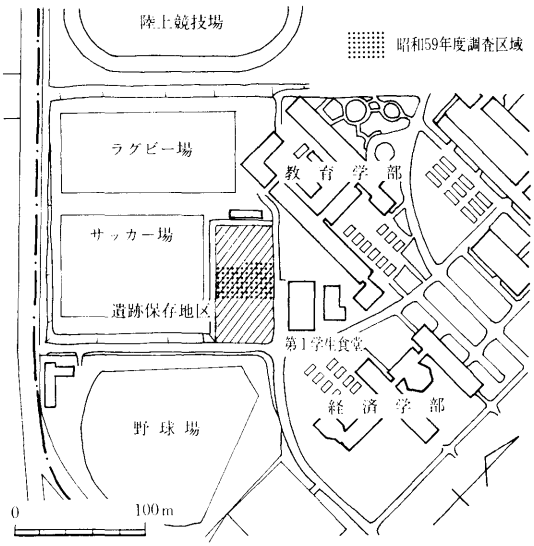



Fig. 64　調査区位置図

## 2　調査の概要

昭和57年度は北端部約900㎡を調査し、竪穴住居跡７棟、土壙33基、溝３条を検出した。

竪穴住居跡は調査区の南・西部を中心に分布しており、弥生時代中期前半～中頃１棟、中期後半２棟、後期後半～古墳時代初頭３棟および弥生時代中期と思われるもの１棟があるが、切り合い関係から少なくとも四時期に細分可能である。平面形態は、中期のものはすべて円形で、宇部市北迫遺跡[2]・防府市大崎遺跡[3]等の中期後半の竪穴住居に見られるような隅丸方形のプランをもつものはなく、円形から方形への平面形態の変化は遺跡保存地区では時期的にやや遅れる傾向にある。中期前半～中頃には規模の大形化した竪穴住居が出現している。大形化のピークに達する中期後半では力学的配慮から主柱数が増加するとともに、主柱が竪穴住居の周壁により近接して配置されるようになり、竪穴住居内の空間分化にひとつの画期が認められる。土壙は弥生時代中期前半～古墳時代前期のもので、中期に属するものが多い。規則的な分布状況ではなく、住居との対応関係は必ずしも明らかではないが、単純計算すると１棟の竪穴住居に３～４基の土壙が伴うものかと推察された。

昭和58年度は前年度調査地域の南隣、つまり遺跡保存地区中央部での調査を予定していたが、施設整備に伴う緊急調査のため先送りとなり、昭和59年度に実施することとなった。

昭和59年度の調査は、昭和59年７月27日から10月16日まで約790㎡について実施した。検出した遺構には竪穴住居跡10棟、土壙19基、溝10条、河川跡、柱穴等がある。

竪穴住居跡は、弥生時代中期後半～古墳時代中期のもので、調査区南半部に集中し、切り合いが著しい。平面形態は円形・方形・長方形の３種があり、円形のものは中期が主体で、後期には方形のものと混在する。壁溝は第10・12号竪穴住居跡を除いた大多数の住居跡に存在し、壁溝の有無による時期差は認められない。最大規模である５世紀後半の第13号竪穴住居跡はベッド状遺構・炉等の屋内施設をもつ火災住居で、床面上には桁および梁と思われる炭化材が方形に組まれたまま焼け落ちた状態で出土した。また桁・梁の周囲に、床面中央に向かって棰木と思われる約20本の炭化材も確認され、竪穴住居の構造形式を知る上で興味深い。土壙は弥生時代中期中葉～終末のもので、平面形態は不整形のものが多い。溝は弥生時代中期後半～古墳時代初頭のもので、残存状態は悪く、遺物の出土量も極めて少ない。河川跡は古墳時代後期～奈良時代に機能していたもので、幅約2.6～4.5ｍ、検出面からの深さ約55～80㎝の規模をもち、南東から北西へ走行する。

なお９月14日には現地説明会を開催し、調査の成果を公表した。調査後は、遺構面を厚さ10～15㎝の真砂土で被覆した後、埋め戻しを行ない、旧状に復帰させている。

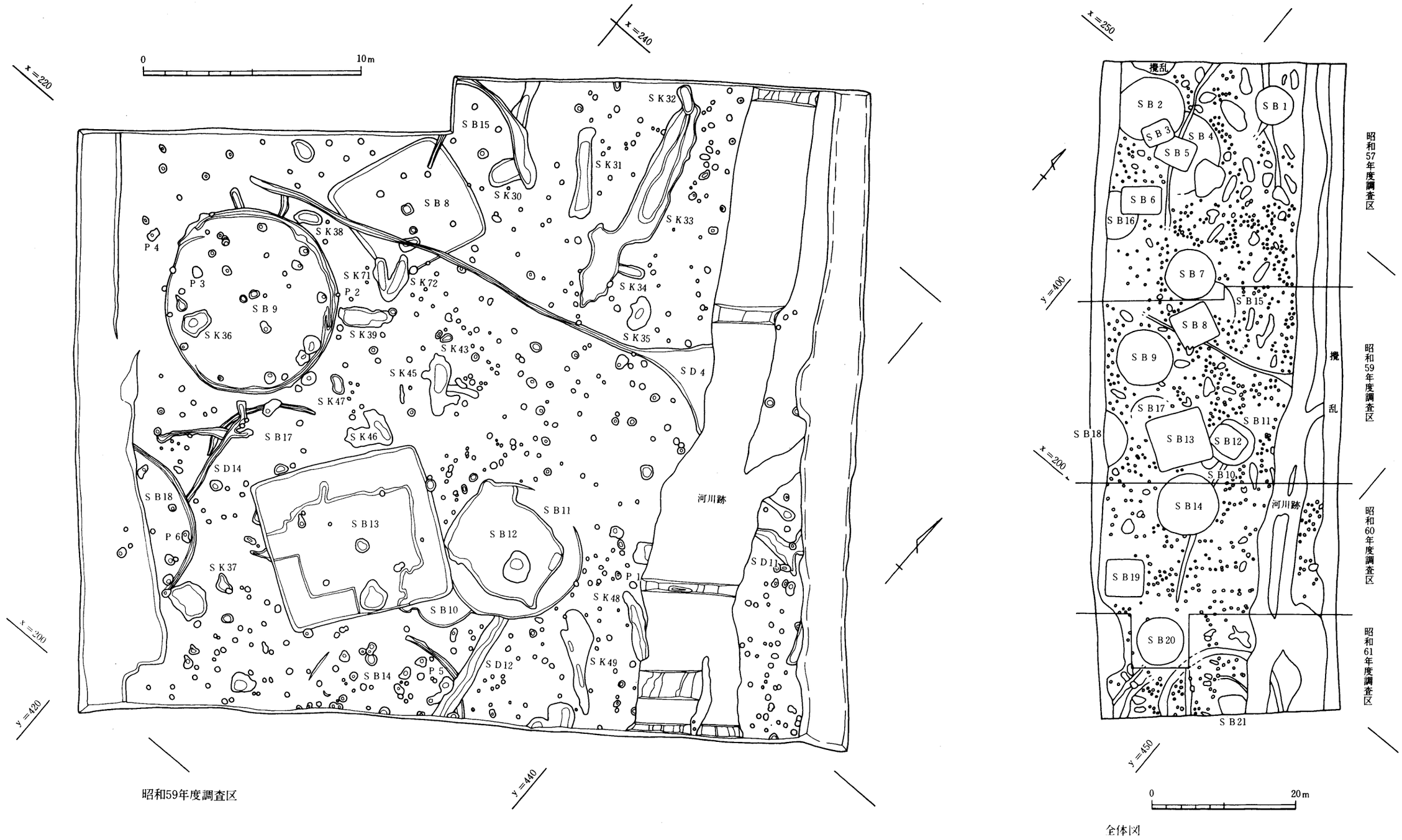



Fig. 65 遺跡保存地区　遺構配置図

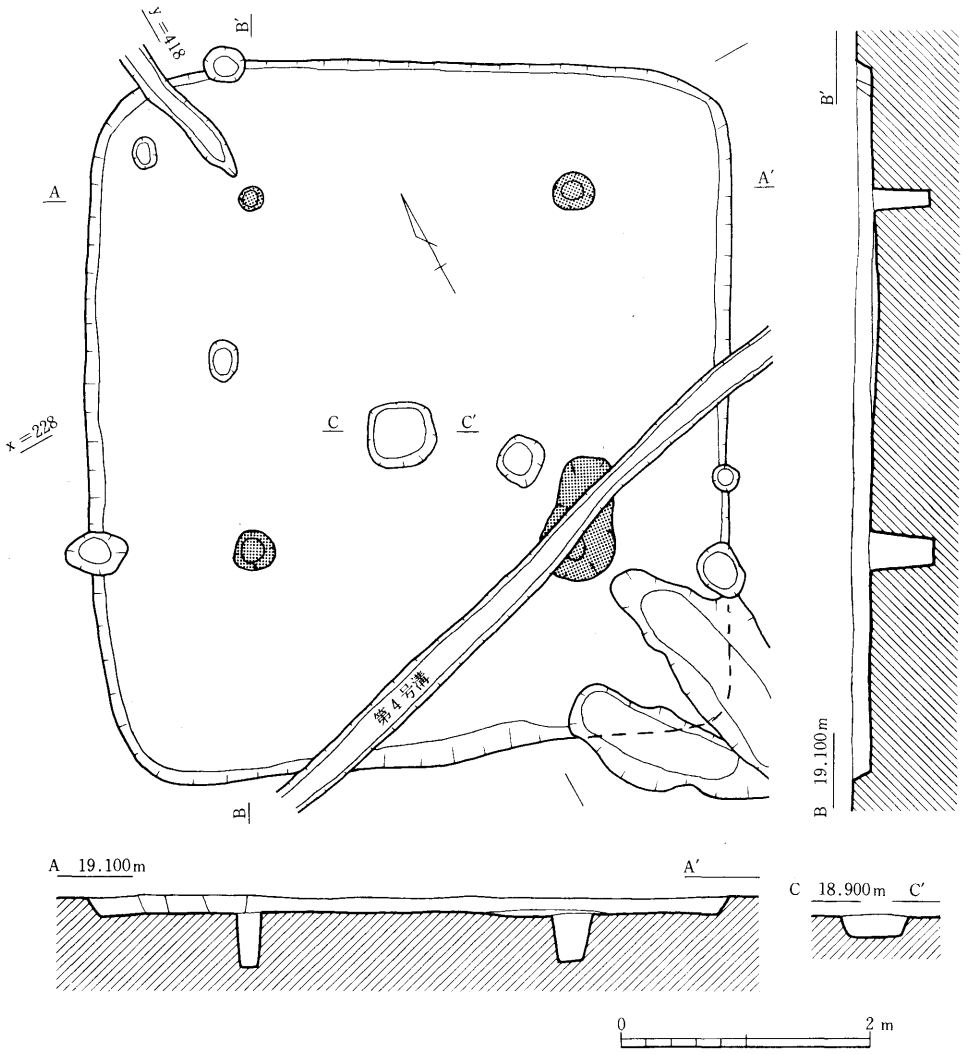



Fig. 66 第8号竪穴住居跡実測図

## 3 遺構・遺物

### 竪穴住居跡

第8号竪穴住居跡（Fig. 66）

調査区の西端中央部で検出した住居跡で、吉田遺跡調査団によってすでに部分的に調査がなされている。第71・72号土壙と重複している住居跡南端部のコーナーは検出できなかった。南端部は第4号溝によって切られているが、土壙との先後関係は明らかでない。平面形態は南辺がやや偏在する隅丸方形で、南北軸574cm、東西軸516cm、床面積25.55m²

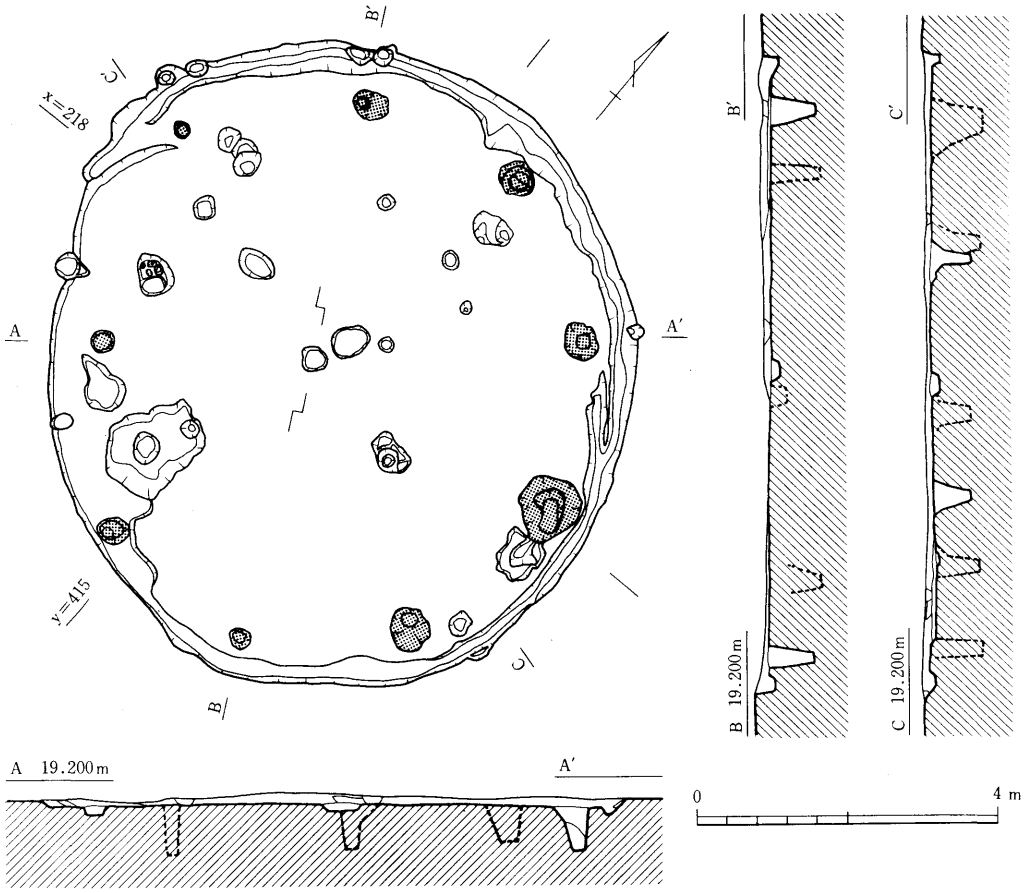



Fig. 67　第９号竪穴住居跡実測図

の規模をもつ。壁高は検出面から10～16cm残存する。主柱は北壁寄りに４本が方形に配置される。炉は中央よりやや南に造出され、平面形態は円形に近く径54～60cm、床面からの深さは18cmである。床面標高は約18.80ｍ。

出土遺物は少なく小片ばかりで図化できないが、丸底に近い甕の底部片があること、第４号溝との切り合い関係、住居の平面形態から、弥生時代後期後半頃に位置づけられよう。

第９号竪穴住居跡（Fig. 67, PL. 19(1)）

調査区の南西端部、第８号竪穴住居跡の南に隣接する弥生時代中期後半の住居跡で、第６号溝を切っている。平面形態はやや楕円形状を呈する円形で、上面径7.8～8.6ｍ、床面積48.39㎡の規模をもつ。残存状態が悪く、床面からの深さは最深部でも10cmを残すにすぎない。主柱は９本で、約2.3～3.0ｍ間隔に周壁に極めて近接して配置されている。また、

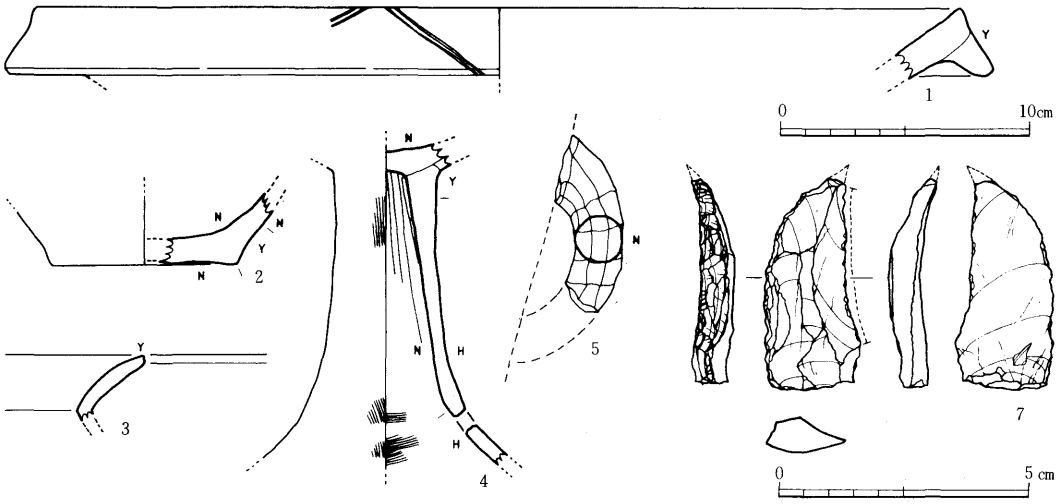



Fig. 68　第９号竪穴住居跡出土遺物実測図

中央穴を挟んで２ヵ所に支柱穴が認められる。なお、壁溝は上面幅20～30cm、床面からの深さ７～16cmで、南西部を除いて全周に巡るが、一部二重となる部分も存在する。西部には住居外への張り出しが認められ、床面へ向かって階段状に低くなっている。玄関的施設かもしれない。床面は北半部がやや高く、床面標高は18.80～18.90ｍである。

出土遺物は比較的多く、弥生土器壺・甕・高坏・把手・有翼支脚等がある。

出土遺物（Fig. 68, PL. 24－１～６・PL. 27－５・PL. 巻頭カラー）

１・２は壺。１は口縁部が斜め下方に短く下垂し、拡張部外面にはヘラによる２条単位の鋸歯文を施文する。３は甕で外彎ぎみに「く」の字に外反する口縁部をもつ。１・３は内外面横ナデ仕上げ。３は底部側面横ナデ、他はナデ仕上げ。４は坏部に中空の脚部を接合する長脚の高坏で、器壁は薄い。外面は縦刷毛目仕上げで接合部付近は横ナデ。脚部内面は穿孔部より上位はナデ、下位は横刷毛目仕上げ。坏部内面ナデ仕上げ。

５は把手で、指圧による粗雑な整形を施す。なお、図示していないが、有翼支脚の翼部（PL. 24－６）、鋤先状口縁をもつ壺等も出土している。

７は竪穴住居埋土中から出土したナイフ形石器（PL. 巻頭カラー）。先端部を欠損するが極めて優品である。遺構検出面である黄褐色粘質土が旧石器時代の遺物包含層で、竪穴住居掘削時に同層から遊離した可能性も考えられる。

対向する打面をもつ石核から剝離された縦長剝片を素材とする一側縁加工のナイフ形石器で、背面左側縁には下縁部を除いてほぼ全縁に腹面側からのブランティングが行なわれ

ている。基部は未調整で打点が残存する。やや彎曲する刃部には使用痕と思われる微細な剝落痕が認められる。メノウ製。

第10号竪穴住居跡（Fig. 69, PL. 19(2)）

調査区の東端中央部に位置し、吉田遺跡調査団によってすでに検出されている小形の住居跡である。第11・13号竪穴住居跡に切られており、周壁の一部が残存しているにすぎない。平面形態は円形と思われ、推定上面径約3.0m、推定床面積約6.7m²の規模をもつものと思われる。遺存状態は悪く、壁高は検出面から7cmである。残存する床面には柱穴、炉跡、壁溝等は認められない。

出土遺物は今回はほとんどないが、吉田遺跡調査団の調査では短く緩やかに「く」の字に外反する口縁部をもつ弥生土器甕が出土し、[4]弥生時代中期前半の住居と考えられる。

第11号竪穴住居跡（Fig. 69, PL. 20(1)）

第10号竪穴住居跡の北東部を切って営まれた弥生時代中期後半の住居跡で、第12・13号竪穴住居跡によって切られている。平面形態は円形で、北部は後世の削平によって消失しているが、上面径684cm、床面積約31m²の規模をもつ。北東部には住居外へ張り出した弧状の造り出しが認められる。なお、南・北2ヵ所に設定したトレンチの所見では、重複する第12号竪穴住居跡の床面が本住居跡の埋土中に位置しており、本住居跡は完掘されていない。そのため柱穴・炉跡等は検出されていない。また壁高は検出面から約16cm残存しており、北部では壁溝が確認された。遺物は主にトレンチ内から出土したが、小片が多い。

出土遺物（Fig. 74－8～11, PL. 24－8～11）

8～11は甕。8は口縁部の破片で、端部は強い横ナデにより窪む。9は頸部下位に断面方形の突帯を貼付し、ヘラによる刻目を施す。内外面とも風化が著しい。なお、図化していないが、跳ね上げ口縁をもつ甕や、短く緩やかに外反する口縁部をもつ壺などがある。

第12号竪穴住居跡（Fig. 69, PL. 20(1)）

第11号竪穴住居跡の内部で検出した5世紀後半の住居跡である。平面形態はいびつな隅丸長方形で、東西軸515cm、南北軸410cm、床面積18.22m²の規模をもつ。南東隅のコーナーには住居外へ張り出す造り出しの部分がある。また北東隅のコーナー付近の床面には、東辺に接して床面より一段高い長さ約80cm、幅約40cmのテラス状の平坦面が存在する。柱穴は検出されなかったが、中央よりやや東寄りには長軸140cm、短軸116cm、床面からの深さ13cmの規模をもつ不整楕円形の炉跡が認められる。床面標高は約19.90m。

出土遺物には土師器甕・高坏がある。

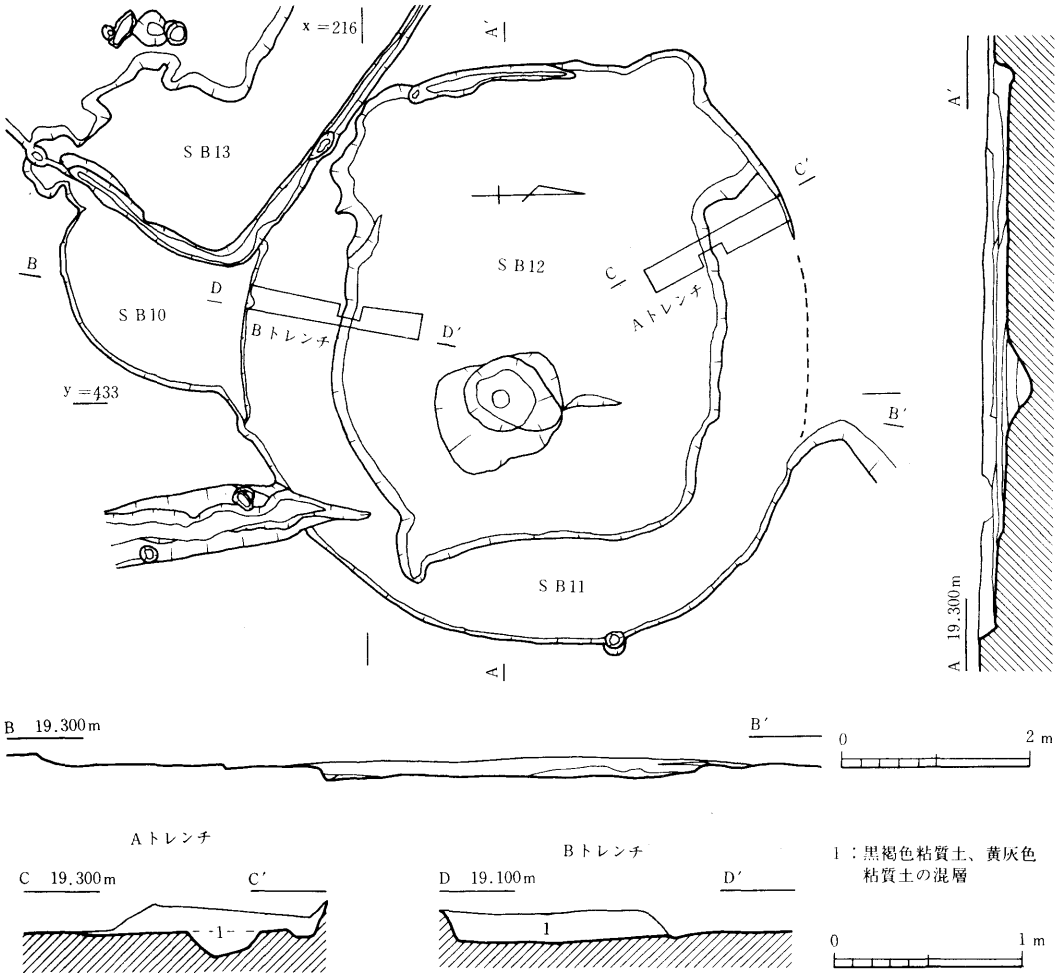



Fig. 69 第10～第12号竪穴住居跡実測図

出土遺物（Fig. 74－12～14, PL. 24－12～14）

12・13は甕。12は底部付近で、長胴の胴部になるものと思われ裾広がりの底部をもつ。胴部外面縦刷毛目、底部側面横ナデ、外底部・内面はナデ仕上げ。13は複合口縁をもつもので、口縁部は斜上方に立ち上がる。内外面とも横ナデ仕上げ。14は高坏で、わずかに屈曲して外彎ぎみに開く坏部をもつ。口縁部内外面横ナデ、坏部内面ナデ仕上げ。

他に住居跡内部からは、直立あるいは外上方へ立ち上がる複合口縁をもつ壺、外彎しながら短く「く」の字に開く甕、中位で反転して外彎しながら開くかなり大きな坏部をもつ高坏が出土したとされる。

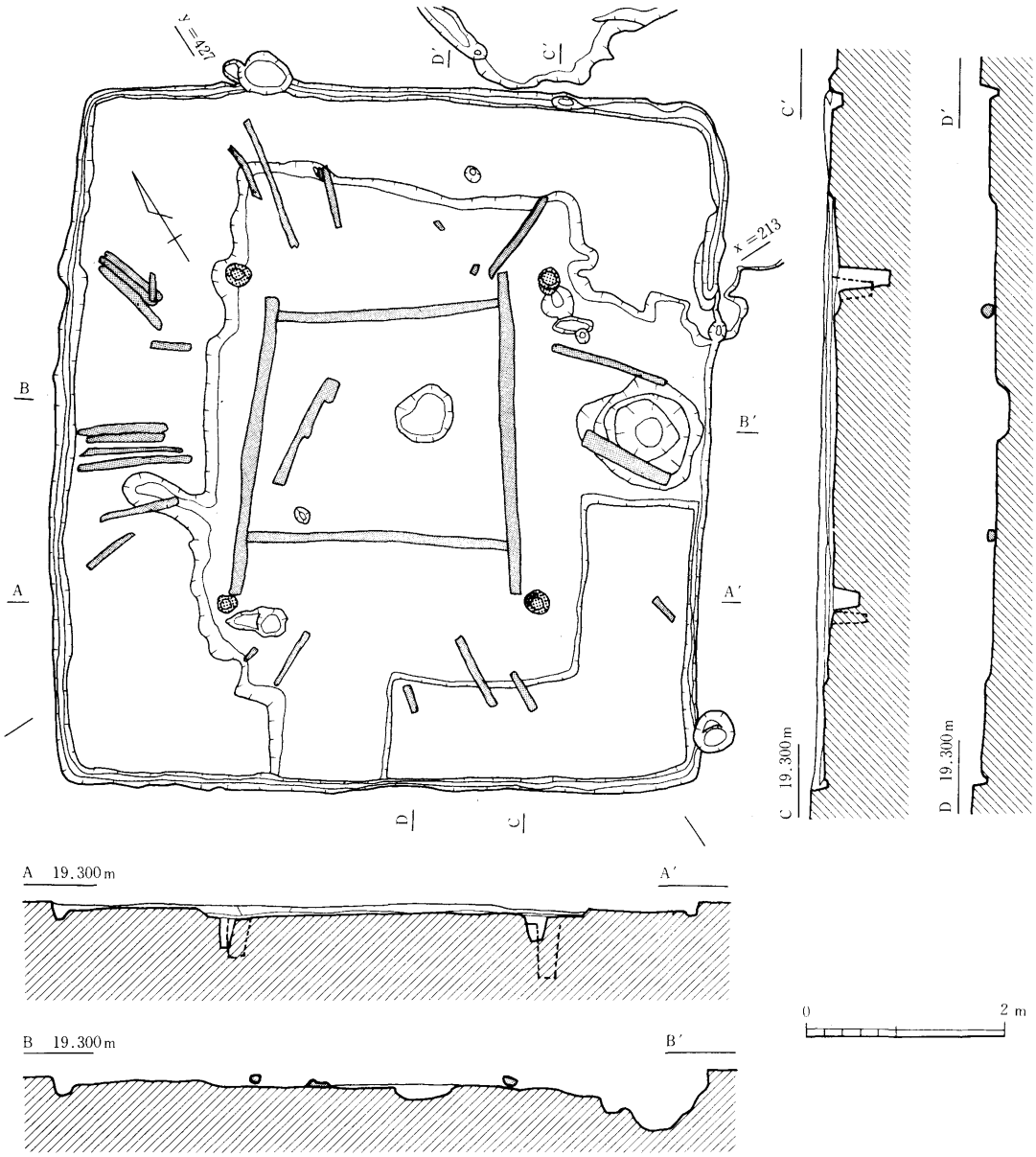



Fig. 70　第13号竪穴住居跡実測図

第13号竪穴住居跡（Fig. 70, PL. 20(2)・21・22(1)(2)）

調査区の南東部に位置する大形の竪穴住居跡で、第10・11号竪穴住居跡を切っている。平面形態は方形で、東辺760cm、西辺764cm、北辺720cm、南辺708cm、床面積53.63m²の規模をもつ。主柱は4本で、竪穴住居の平面形態と相似形をなして方形に配置される。

屋内施設として、周壁に沿って幅0.8～1.5m、床面からの高さ4～7cmのベッド状遺構が巡るが、南・東両辺の中央付近で途切れている。南辺部の空間は幅約120cmで、出入口と想定される。壁溝は上面幅10～20cm、ベッド状遺構上面からの深さ4～10cmであるが、東辺部では壁溝が確認できず、幅約170～210cmの空間があり、床面に炭化物の充填した長軸137cm、短軸120cmのほぼ円形の掘り込みが認められた。深さは床面から47cmで、底面・壁面は焼けている。前調査者である小野忠凞氏はこれを炊事用の炉と考え、この部分の空間が炊事場として使用されたものと推定している。設置場所、性格および竪穴住居の時期から、カマドが出現する前段階の施設と思われ興味深い。またこれとは別に、床面中央よりやや東には径65cm、深さ16cmの円形の炉跡が存在する。

さらにこの住居は火災に遭って廃絶したと思われ、床面上には桁・梁と思われる径12～15cmの4本の炭化材が方形に組まれたまま焼け落ちた状態で検出されている。南・北の炭化材は桁と考えられ、その上位に東・西の炭化材が認められる。また、桁・梁の周囲には棰木と推定される約20本の炭化材が床面中央に向かって放射状に確認されているが、前回の調査ですでに大半が取り上げられたのか、今回の調査では数本しか検出できなかった。なお方形に組まれた桁・梁の内部の床面上には棰木に比べひとまわり大きな炭化材が認められ、規模・検出位置・桁との重複関係から、床面南西部に立てられた主柱の一部と推察される。棟木に対応する炭化材が認められないこと、桁・梁・棰木等の炭化材の検出状況、竪穴住居の平面形態、主柱の配置状況などから、寄棟造屋根が想定される。床面標高は約18.90m。

出土遺物には土師器壺・甕がある。

出土遺物（Fig. 74－15～18, PL. 24－15～18）

今回の出土遺物は小片が多く図化しうるものが少ない。18は、東壁中央部の炊事用の炉跡と思われる掘り込みから出土した複合口縁の甕。小さく屈曲する頸部から反転して、外彎しながら斜上方へ立ち上がる口縁部をもつ。内外面とも横ナデ仕上げ。

また、住居内からは土師器甕・壺・鉢・高坏等が出土したとされる。壺は口縁部外面に突帯を貼り付け複合口縁状になるもの、ほぼ直立する短い口縁部をもつものなどがある。鉢は丸底で、内彎して開く体部をもつ小形品3個体が図化されている。高坏はやや反り気味に大きく開く脚部に、内彎して立ち上がる坏部をもつものである。

切り合い関係からみると第12号竪穴住居跡より新しいが、総じて5世紀後半頃のものと考えられる。

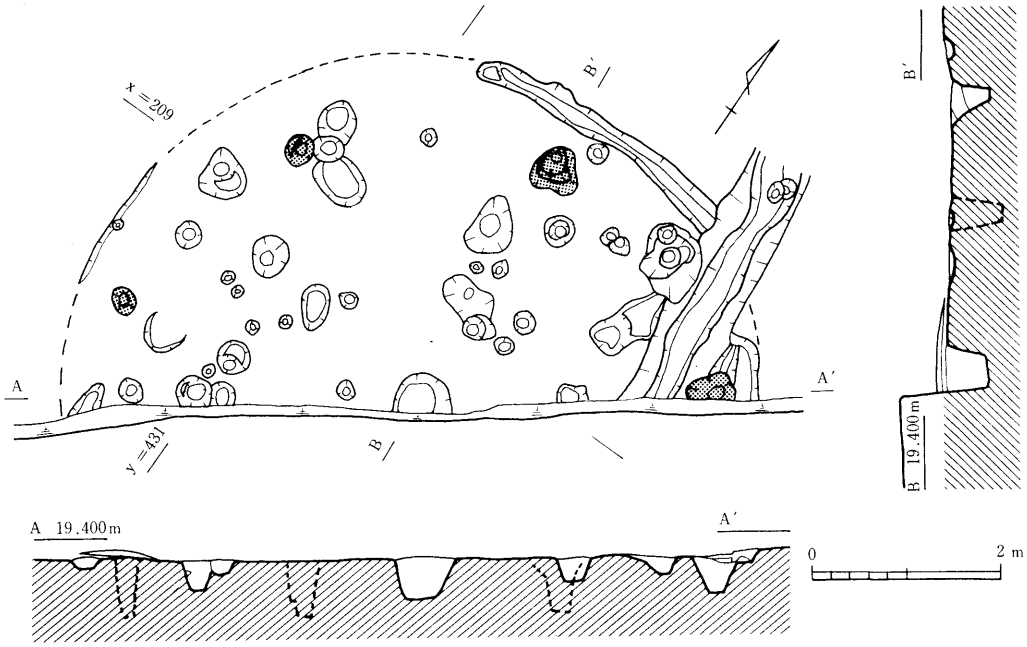



Fig. 71　第14号竪穴住居跡実測図

第14号竪穴住居跡（Fig. 71）

調査区の南東部、第13号竪穴住居跡の東に隣接する大形の住居跡で、吉田遺跡調査団によってすでに部分的に検出されている。昭和59年度の調査では住居の南半部が調査区外にあたるため完掘しなかったが、翌60年度の調査で延長部分を調査していることから、詳細は昭和60年度の調査報告に譲り、本稿ではその概要を記すにとどめる。

平面形態は円形と思われるが、削平が著しく周壁はほとんど消失している。径約7.4m、床面積約40m²前後の規模をもつものと推定され、一部に壁溝が巡っている。主柱は８本で中央穴が認められる。

遺物は全く出土しておらず、第12号溝との切り合い関係も判然としないため時期は明らかでないが、椹野川・佐波川各流域での竪穴住居の平面形態・規模・主柱数等から推して、弥生時代中期のものと考えられる。

第15号竪穴住居跡

調査区の西端中央部に位置する平面形態が円形と思われる住居跡である。後世の削平によって周壁が消失しているが、弧状に巡る壁溝の存在によって住居跡として取り扱った。上面径約870cm、床面積約50m²前後の規模をもつものと推定されるが、主柱数、屋内施設

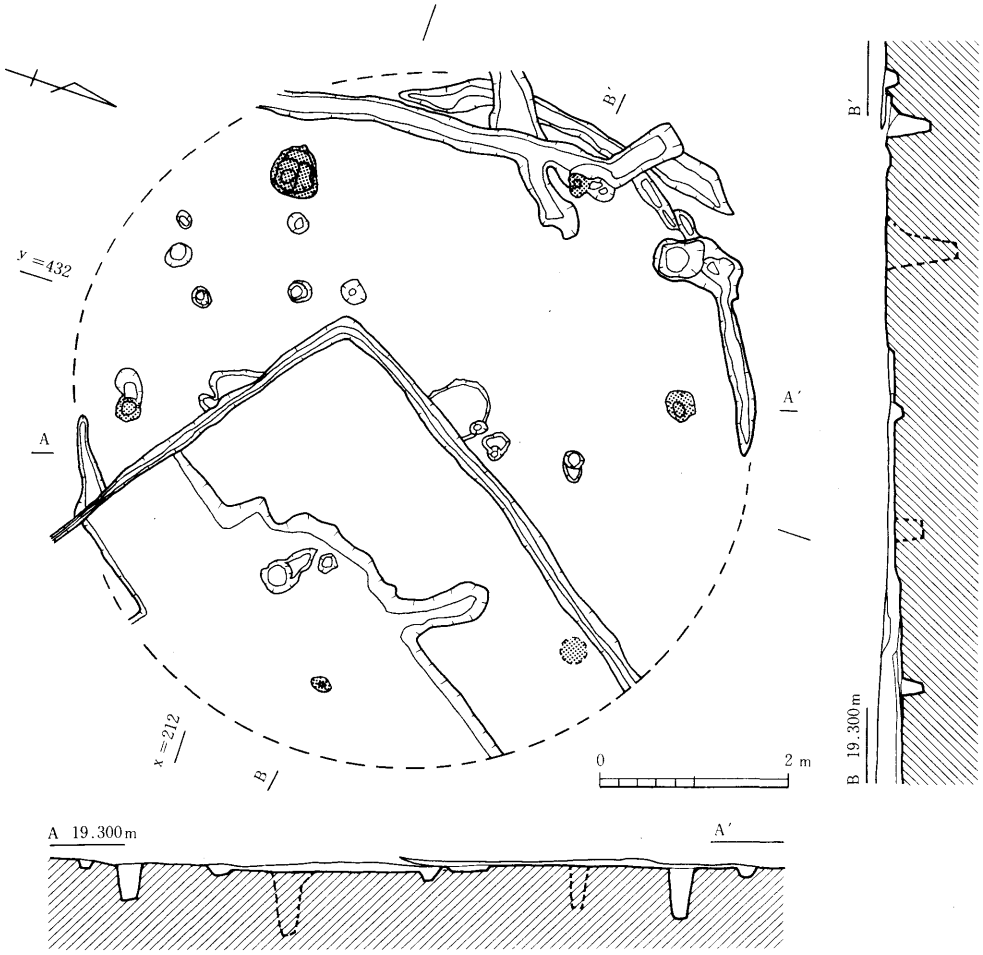



Fig. 72　第17号竪穴住居跡実測図

等は明らかではない。

出土遺物はないが、弥生時代中期と考えられる第７号竪穴住居跡に切られており、遺跡保存地区での円形の平面形態をもつ竪穴住居跡の時期、分布状況などから弥生時代中期のものと思われる。

第17号竪穴住居跡（Fig. 72, PL. 22(3)）

調査区の南部で検出した住居跡であるが、後世の削平によって周壁が消失しており、壁溝のみが残存する。第13号竪穴住居跡によって東半部が半分近く切られている。壁溝の検出状況から、平面形態は円形と思われ、径約3.6m、床面積約35m²前後の規模をもつものと推察される。主柱は１本未検出であるが６本が配置されたものと考えられ、床面中央に

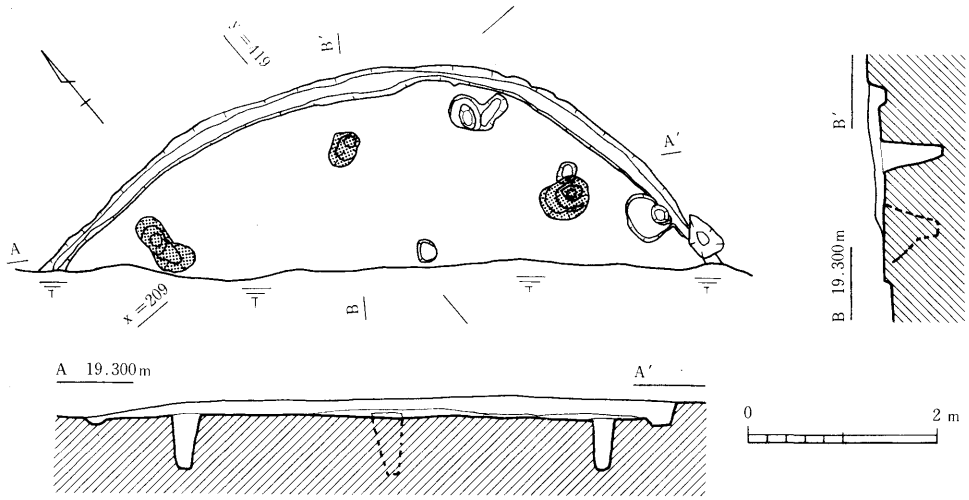



Fig. 73 第18号竪穴住居跡実測図

は中央穴が存在する。

壁溝・柱穴からの出土遺物はなく時期は明らかでないが、第14号竪穴住居跡同様、平面形態・規模・主柱数から推して弥生時代中期のものと思われる。

第18号竪穴住居跡（Fig. 73, PL. 22(4)）

調査区の南端部、第17号竪穴住居跡の南に隣接する弥生時代後期終末の住居跡である。昭和59年度の調査で新たに検出したもので、西半部はサッカー場の造成時に削平され消失しているが、残存部分では検出面から最大18cmの壁高を測る。平面形態は円形と思われ、上面径約９ｍ、床面積約55m²前後の規模をもつものと推定される。床面には、周壁に沿って上面幅15～25cm、床面からの深さ３～５cmの壁溝が巡る。住居に伴う柱穴は周壁寄りに３個認められ、住居の平面規模、柱穴間隔から７本の主柱が想定される。床面は東から西にわずかに下降しており、床面標高は18.95～19.00ｍ。

出土遺物は第９号竪穴住居跡に次いで多く弥生土器甕・壺・鉢などがあるが、図化しうるものは少ない。

出土遺物（Fig. 74－19～22, PL. 24－19～21・PL. 27－22）

19～21は甕。19はやや古い要素をもつもので、口縁端部内面に貼土帯を貼付して肥厚させ、端部外面には２条の凹線が巡る。風化が著しく調整不明。22はほぼ丸底に近い底部をもつ鉢で、体部は内彎しながら開き、口縁部は短く外反する。口縁部内外面横ナデ、底部内外面ナデ仕上げで、体部は風化のため調整不明。

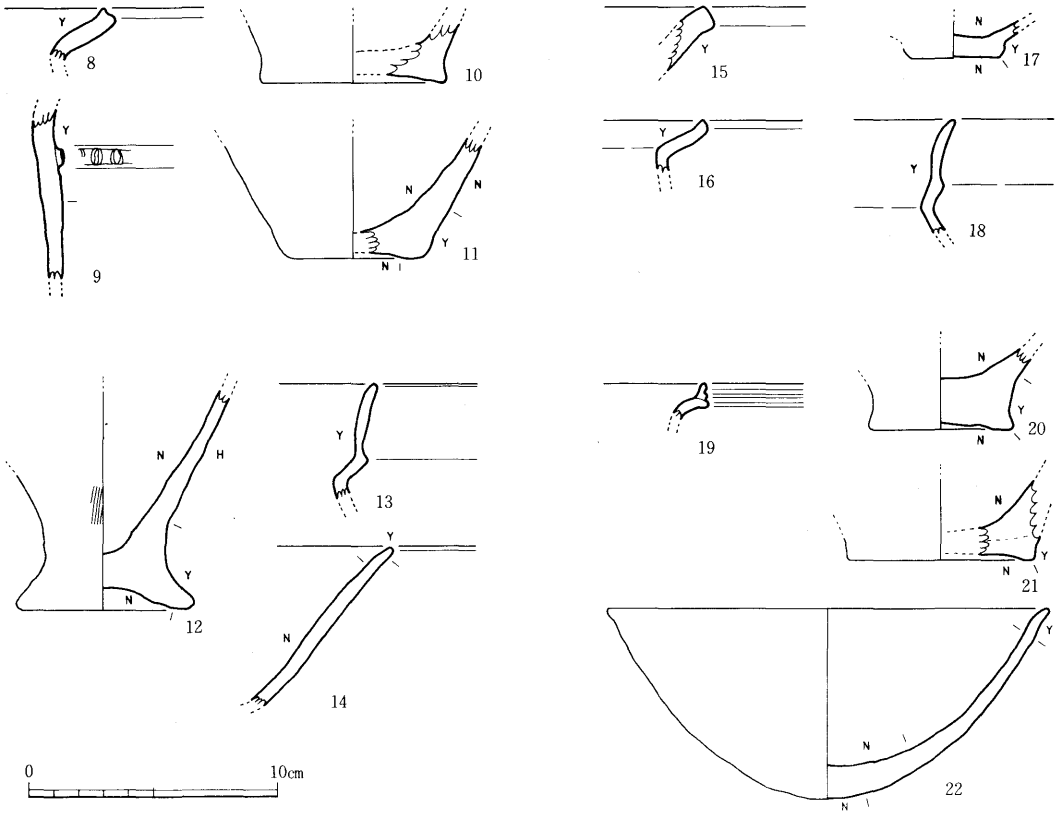



Fig. 74　第11～13・18号竪穴住居跡出土遺物実測図

## 土壙

弥生時代中期中葉から終末にかけてのもの19基を検出した。集中範囲は認められず、調査区全域に分布する。平面形態は不整形であるが、長楕円形状を呈するものが多い。

以下、主なものを述べる。

第30号土壙（Fig. 75）

調査区の西端中央部に位置し、北部が第15号竪穴住居跡と切り合っているが、先後関係は明らかでない。平面形態は長方形に近いものと思われ、長軸144cm以上、短軸100cmの規模をもつ。南辺部の壁面の立ち上がりは比較的緩やかで、深さは検出面から24cmである。長軸方向は北東－南西で、底面標高は約18.70m。

出土遺物は弥生土器甕・高坏等であるが、小破片が多く出土量も少ない。弥生時代後期。

出土遺物（Fig. 77－23～25, PL. 24－23・25）

23はやや裾広がりになる窪み底の甕の底部と思われるもの。外面は接地面より上位が横

ナデ、外底面および内面ナデで、内面のナデは粗雑。24・25は坏部に脚部を挿入する高坏の脚部。24は坏部と脚部の接合部から斜下方へそのまま開く。内面ナデ仕上げ。外面風化のため調整不明。25は短い脚柱部を有するもので、内外面とも風化著しく調整不明であるが、脚部内面にわずかにシボリ痕が認められる。

第31号土壙（Fig. 75）

調査区の西端中央部付近、第30号土壙の西に隣接する土壙である。他の遺構との切り合い関係はない。平面形態は不整長方形をなし、長軸416cm、短軸66cmの規模をもつ。北・南両壁面の立ち上がりは緩やかで、検出面からの深さは15～20cmである。長軸方向は北西－南東で、底面標高は約18.75m。出土遺物には弥生土器甕・壺等がある。弥生時代後期。

出土遺物（Fig. 77－26～28, PL. 24－26～28）

26・28は甕。26は直線的に開く長めの口縁部をもち、端部は強い横ナデによりやや窪む。内外面とも横ナデ仕上げ。28は窪み底の底部で接地面から側面付近にかけて横ナデ、他はナデ仕上げ。27は壺の底部で、側面付近は粗雑な横ナデ、他はナデ仕上げ。

第32号土壙（Fig. 75）

調査区の北端部付近に位置し、第33号土壙を切っている。平面形態は長楕円形で、長軸122cm、短軸55cm、検出面からの深さ42cmの規模をもつ。長軸方向は北西－南東で、底面標高は約18.50m。出土遺物はなく、時期は明らかでないが、第33号土壙との切り合い関係から弥生時代後期のものと考えられる。

第33号土壙（Fig. 76）

調査区の北西部に位置する大形の土壙で、第32号土壙によって切られている。南北に長い特異な平面形態で、南北長10.70m、短軸145cmの規模をもつが、南半部で不規則に屈曲しており、2基の土壙ないしは溝と土壙とが重複している可能性がある。北半部は2段にわたって掘り込まれており、検出面からの深さは約40cm、南半部では約15cmである。底面標高は北半部で約18.55m、南半部では約18.80mで、長軸方向は北－南。出土遺物は弥生土器壺・甕等比較的多いが小片で、図化しうるものは極めて少ない。弥生時代後期。

出土遺物（Fig. 77－29・30, PL. 24－29・30）

29は壺の肩部で、ヘラによる沈線の区画内に有軸羽状文を施文する。内外面とも風化著しく調整不明。30は底径の小さな上げ底の甕の底部。外底面・内面ナデ、他は不明。

第35号土壙（Fig. 75）

調査区の北半中央部、第33号土壙の東に隣接する土壙である。平面形態は不整形な楕円

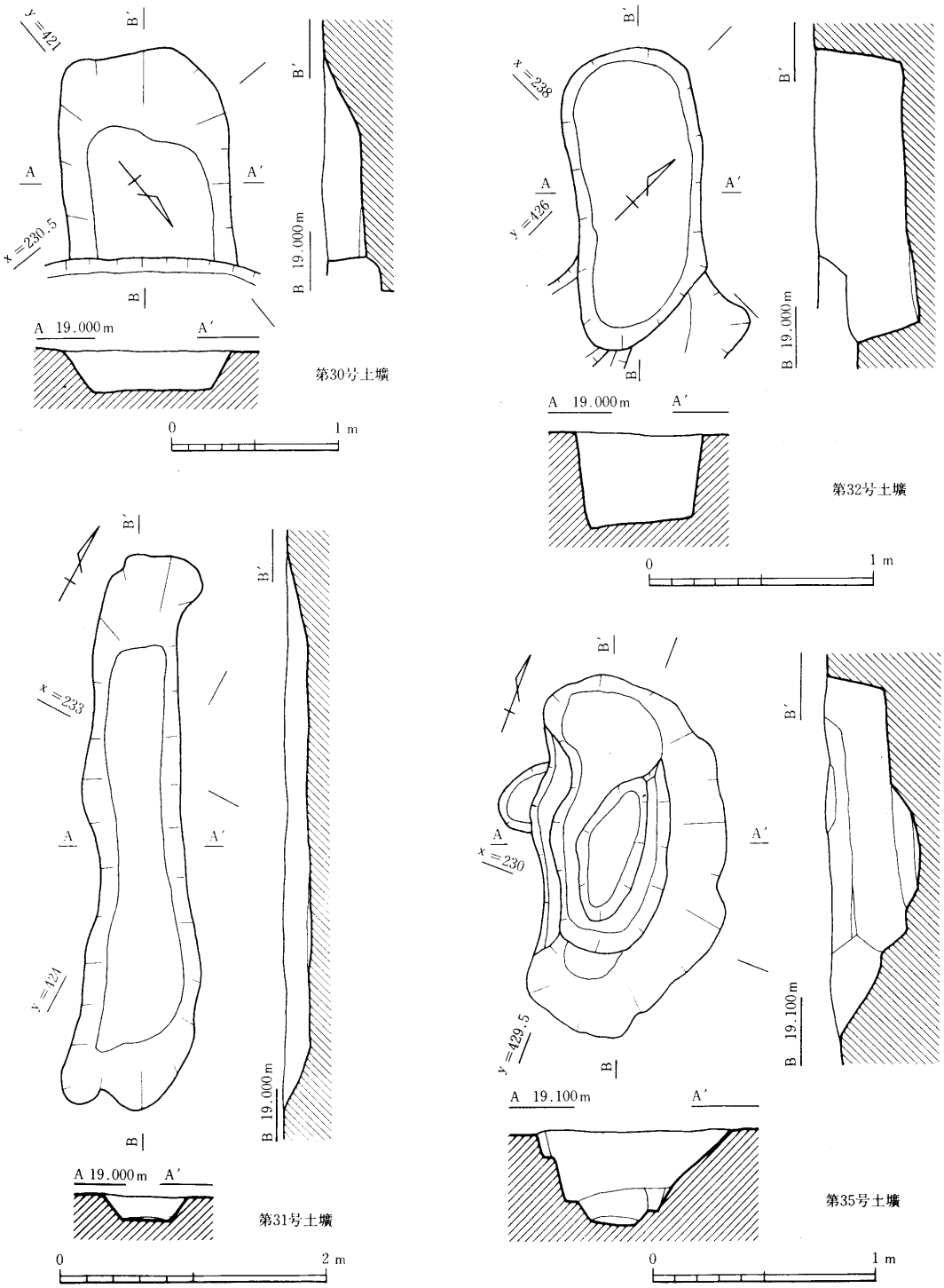



Fig. 75　第30～32・35号土壙実測図

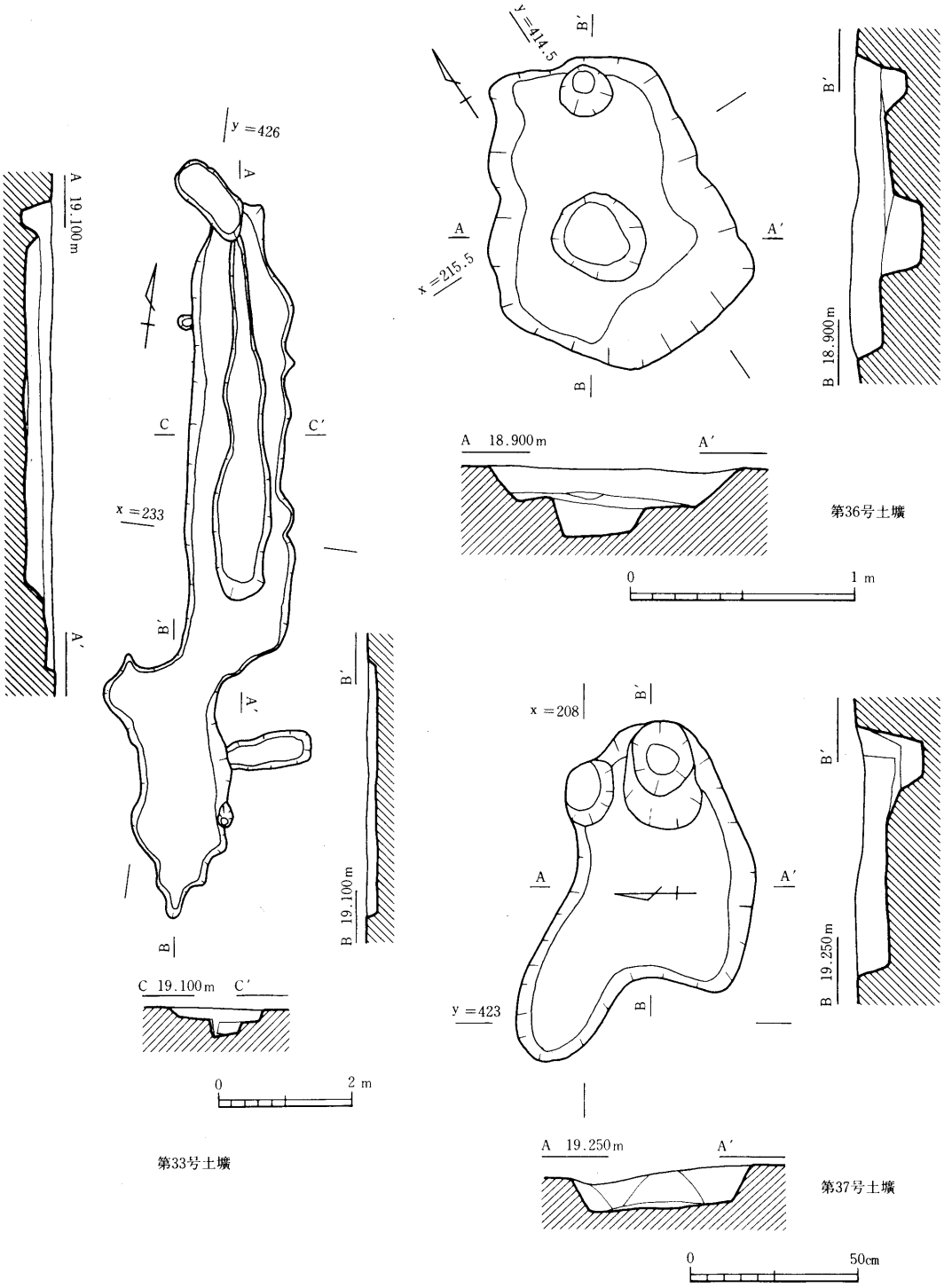



Fig. 76 第33・36・37号土壙実測図

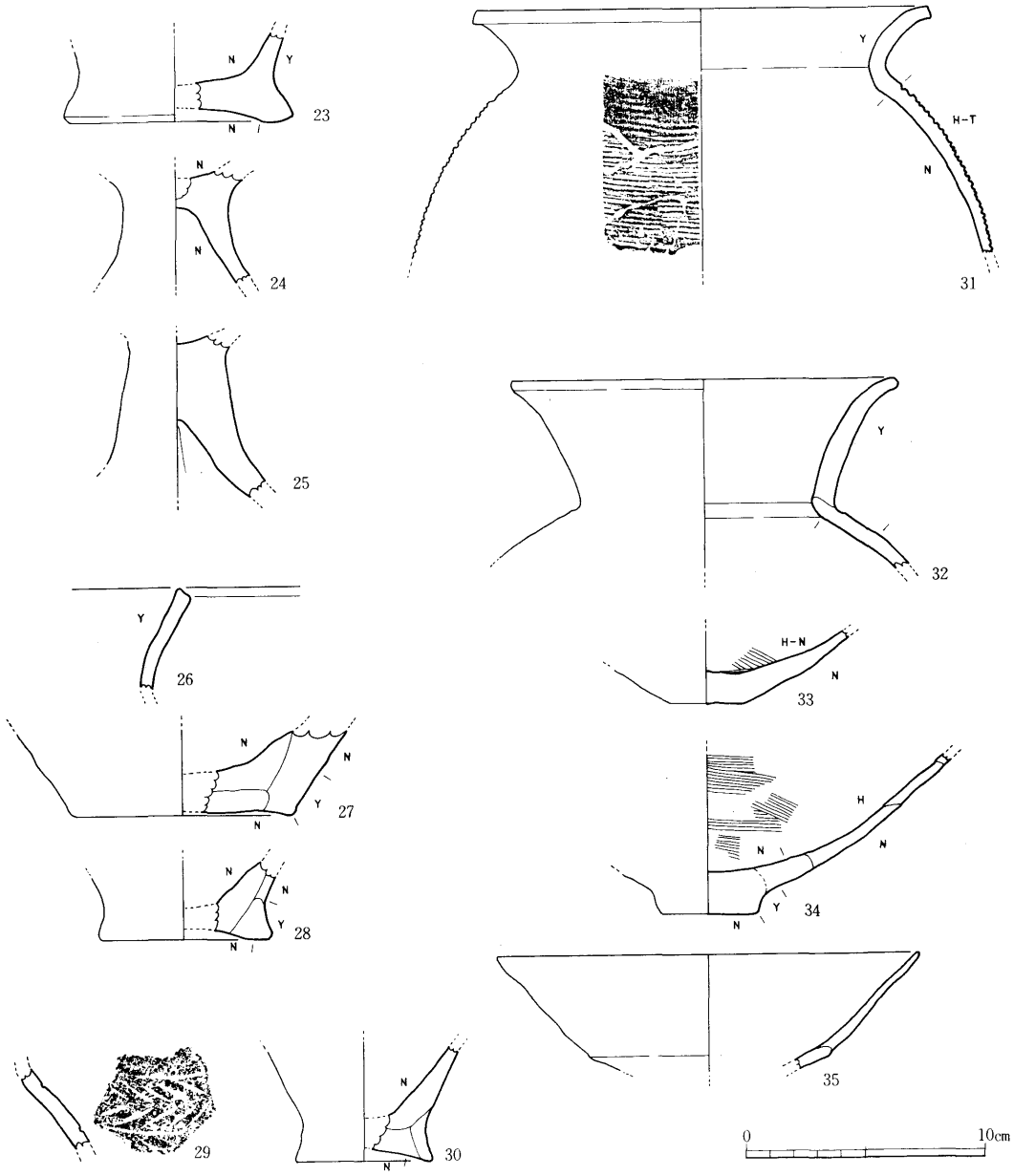



Fig. 77　第30・31・33・36・39号土壙出土遺物実測図

形状を呈し、長軸161cm、短軸87cmの規模をもつ。2～3段にわたって掘り込まれており、北半部の平坦面は南に向かって下降している。底面は狭く、長軸約60cm、短軸約20cmで、検出面からの深さは42cmである。底面標高は約19.55mで、長軸方向は北－南。

出土遺物は皆無で、他の遺構との切り合いもなく時期不明。

第36号土壙（Fig. 76）

調査区の南西部、第９号竪穴住居跡の内部で検出した小形の土壙である。出土遺物から、住居跡より時期的に新しく、弥生時代終末に比定されるが、調査時には切り合い関係はつかめなかった。平面形態は不整長方形状を呈し、長軸135㎝、短軸110㎝、検出面からの深さ15㎝の規模をもつ。底面の中央部よりやや南には径35～40㎝、底面からの深さ12～18㎝の円形の掘り込みが存在するが、本土壙に伴うものかどうか明らかでない。底面標高は約18.60ｍで、長軸方向は北東－南西。出土遺物には庄内式併行期の甕がある。

出土遺物（Fig. 77－31, PL. 27－31）

31は甕。口縁部は内面に稜をもたず、「く」の字に外彎しながら開き、端部はさらに外反する。口縁端部外面は面をもつ。胴部外面タタキ、内面ヘラケズリ、頸部～口縁部内外面横ナデ仕上げ。外面ほぼ全面に煤の付着が認められる。

第37号土壙（Fig. 76）

調査区の南西部、第13・18号竪穴住居跡間に位置する小形の土壙である。西半部がくびれており、長軸75㎝、短軸55㎝、検出面からの深さ10～14㎝の規模をもつ。底面標高は約19.10ｍ。遺物は弥生土器小片若干が出土し、断面「Ｍ」字状の貼付突帯を有する壺の胴部片が含まれていることから、弥生時代中期に位置づけられよう。

第38号土壙（Fig. 78）

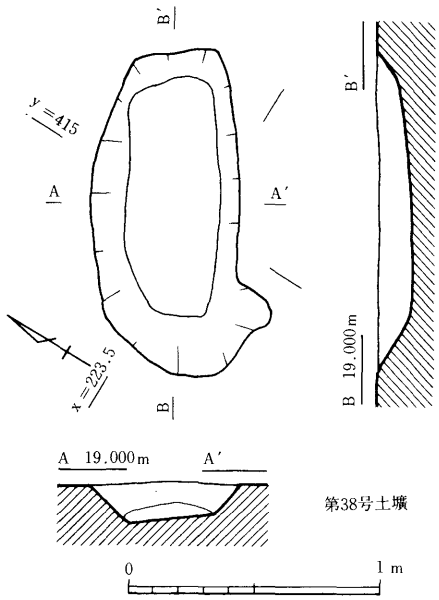
調査区の南西部、第９号竪穴住居跡の北に隣接する小形の土壙。平面形態は長楕円形で、長軸126㎝、短軸62㎝、検出面からの深さ14㎝の規模をもつ。底面標高は約18.80ｍ、長軸方向は北東－南西。出土遺物は皆無で、他の遺構との切り合いもなく、時期は不明。

第39号土壙（Fig. 78）

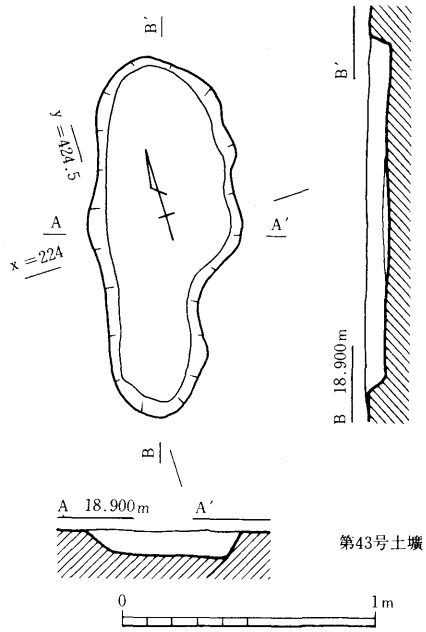
調査区中央部よりやや西、第９・18号竪穴住居跡間に位置する。第９号竪穴住居跡と極めて近接するが、切り合い関係にはない。平面形態は不整形な長方形状で、長軸251㎝、短軸88㎝の規模をもつ。西辺部には壇状の狭い平坦面がある。底面は北東から南西へ緩やかに下降しており、最深部で検出面からの深さが32㎝、底面標高が約18.70ｍとなる。長軸方向は北東－南西。出土遺物には庄内式併行期の壺・甕・高坏等がある。弥生時代終末。

出土遺物（Fig. 77－32～35, PL. 24－33～35・27－32）

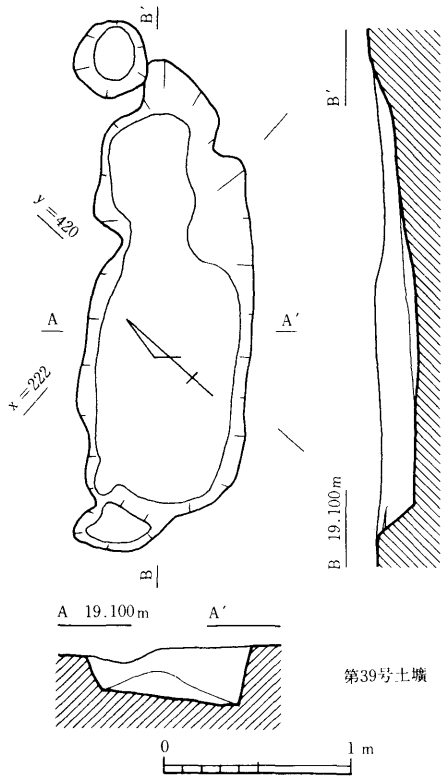
32は壺で、35と同一個体の可能性がある。口縁部は直線的に「く」の字の外反し、口縁端部はさらに外方へ内彎気味に開く。端部は丸くおさめる。精選された粘土を用い、頸部



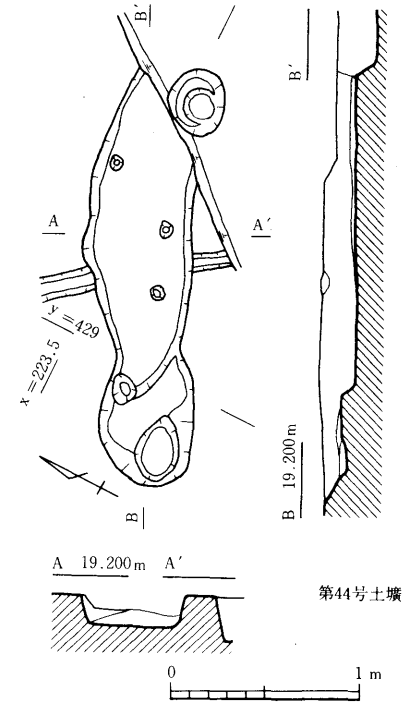

第38号土壙




第43号土壙




第39号土壙




第44号土壙

**Fig. 78** 第38・39・43・44号土壙実測図

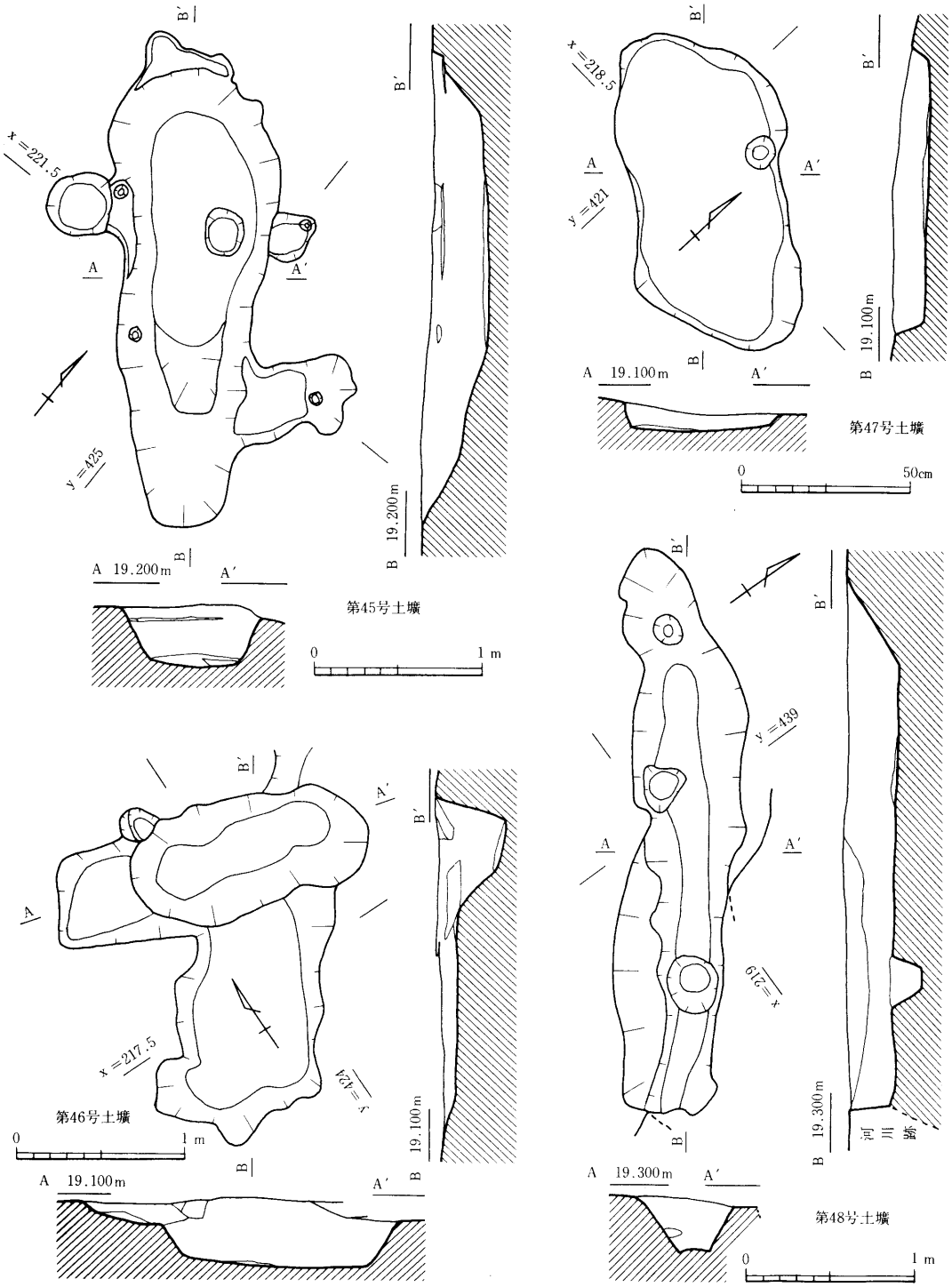



Fig. 79　第45～48号土壙実測図

外面・口縁部内外面横ナデ仕上げ。胴部外面風化のため調整不明。33は甕ないしは壺の底部で丸底に近い。内面刷毛目仕上げ、外面風化のため調整不明。34は円盤状の突出した特異な底部をもつ壺。精選された粘土を用いているが、整形は粗雑で粘土帯接合痕が明瞭に残る。内面に左上がりの刷毛目が残るが、外面は風化のため調整不明。

35は高坏で、坏部上半は下半部に比べ長く伸びて直線的に開き、口縁部付近でわずかに外方へ屈曲する。口縁端部は尖る。内外面とも風化のため調整不明。

第43号土壙（Fig. 78）

調査区の中央よりやや北西に位置する小形の土壙である。平面形態は不整形な楕円形状を呈し、長軸133cm、短軸60cmの規模をもつ。後世の削平のため残存状態は悪く、検出面からの深さは10cmを残すにすぎない。底面標高は約18.75m、長軸方向は北－南。

土壙内から出土遺物がなく、他の遺構との切り合いもないため、時期は明らかでない。

第44号土壙（Fig. 78）

調査区の中央部、第43号土壙と第11号竪穴住居跡間に位置する。平面形態長楕円形状で、東端部は後世の削平により消失している。長軸225cm以上、短軸57cm、検出面からの深さ20cmの規模をもつ。南西端部には底面から約7cm上位に壇状の平坦面を有する。底面標高約18.90m、長軸方向は北東－南西。弥生土器甕・高坏等が出土した。弥生時代中期後半。

出土遺物（Fig. 81－36～38, PL. 24・25－36～38）

36・37は甕。36は直線的に「く」の字に外反する口縁部をもち、端部は強い横ナデにより肥厚ぎみになる。口縁部内外面粗雑な横ナデ、胴部内外面はナデ仕上げ。37は底部で接地面～底部側面付近は横ナデ、外底面ナデ仕上げ、他は風化のため不明。

38は高坏の脚部で端部外面には面をもつ。端部内外面横ナデ、他はナデ仕上げ。

第45号土壙（Fig. 79）

調査区のほぼ中央、第44号土壙の西に隣接する土壙である。平面形態は不整形な長楕円形状を呈し、東辺の南半部には幅約40cm、長さ約65cmの突出部をもつ。また計3ヵ所に壇状の狭い平坦面が存在し、長軸283cm、短軸64cm、検出面からの深さ38cmの規模をもつ。南東辺部の底面からの立ち上がりは緩やかである。底面標高は約18.70m、長軸方向は北西－南東。出土遺物には弥生土器壺、砥石等がある。弥生時代中期。

出土遺物（Fig. 81－39～41, PL. 25－39・40・PL. 27－41）

39は断面「M」字の扁平な貼付突帯をもつ壺の胴部。外面は突帯付近横ナデ、以下縦刷毛目、内面ナデ仕上げ。40は口縁端部内面を内上方へ突出させるいわゆる跳ね上げ口縁の

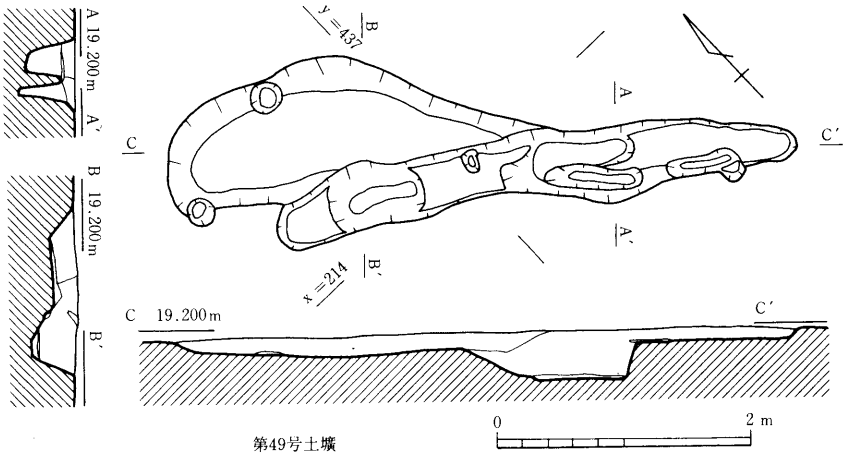



Fig. 80　第49号土壙実測図

甕で、端部外面はほぼ平坦。口縁部内外面横ナデ。

41は6面全面を研砥面とする小形の砥石。各面とも基本的には長軸方向に平行する研砥が行なわれているが、正面中央部には直交する幅約2～3㎜、深さ約1㎜の樋状の研砥痕が2条認められる。凝灰岩製。

第46号土壙（Fig. 79）

調査区の中央よりやや南、第13号竪穴住居跡に隣接する。2ないし3基の土壙が重複している可能性があるが、調査時には切り合いが認められなかったため一括して取り扱った。平面形態は「L」字形で、南北軸203㎝、東西軸188㎝の規模をもつ。検出面からの深さは西・南西半部で10～14㎝であるが、北東部分は擂鉢状にさらに約30㎝落ち込んでいる。最深部での底面標高は約18.70m。弥生土器の甕等が出土した。弥生時代中期中葉。

出土遺物（Fig. 81－42, PL. 25－42）

ほとんど張りのない胴部に直線的に「く」の字に外反する口縁部をもつ。端部は面をもたない。外面頸部付近に煤が付着する。胴部外面縦刷毛目、内面横刷毛目仕上げ。口縁部外面横ナデ、内面横刷毛目の後横ナデ仕上げ。

第47号土壙（Fig. 79）

調査区の中央よりやや南西、第9・13号竪穴住居跡間に存在する小形の土壙である。平面形態は不整長方形状をなし、長軸84㎝、短軸46㎝の規模をもつが、後世の削平により検出面からの深さは10㎝を残すにすぎない。底面標高は約19.00m、長軸方向は北西－南東。

土壙内からの出土遺物はなく、他の遺構との切り合いもないことから、時期は不明。

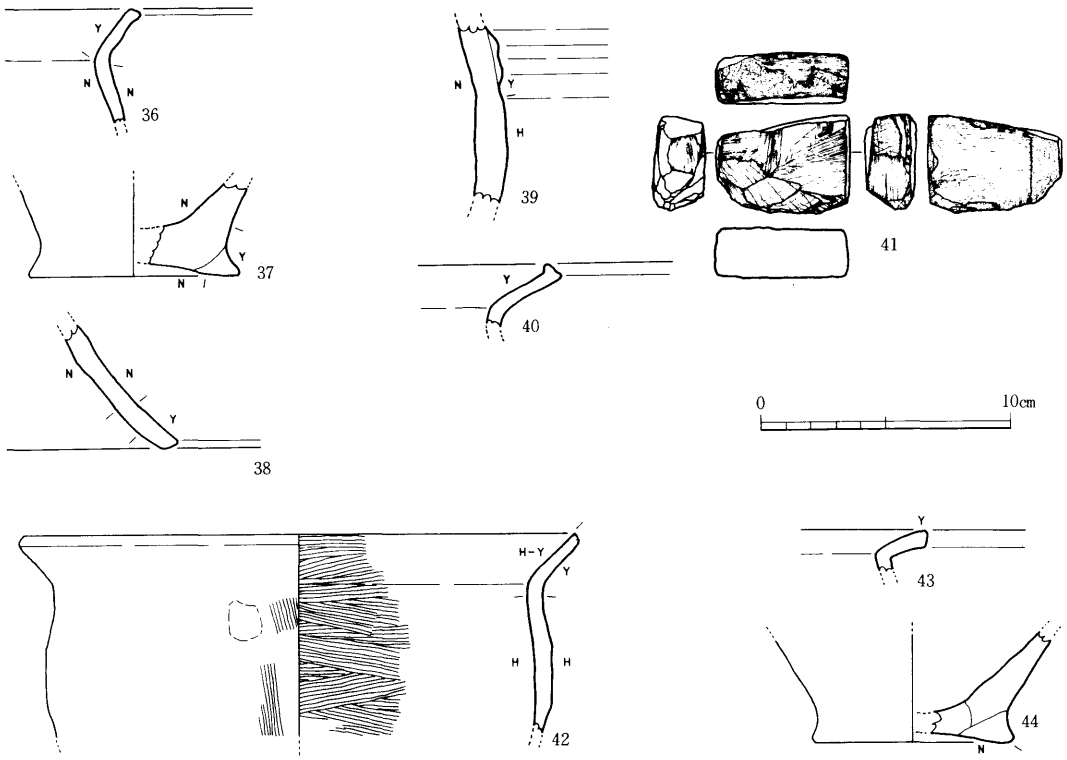



Fig. 81　第44～46・49号土壙出土遺物実測図

第48号土壙（Fig. 79）

調査区の東端部、第11号竪穴住居跡に隣接する土壙である。平面形態は長楕円形状で、溝かもしれない。東端部付近を河川跡によって切られており、長軸237cm以上、短軸60cm、検出面からの深さ30cmの規模をもつ。底面標高約18.90m、長軸方向は北西－南東。

土壙内からの出土遺物はなく、時期は明らかでないが、第49号土壙と形態・長軸方向が類似していること、また第45号土壙とも長軸方向が近似していることから、各土壙は同時期に近いものと考えられ、弥生時代中期に比定されよう。

第49号土壙（Fig. 79）

調査区の東端部、第48号土壙の南に隣接する。平面形態は三角形で、2基の土壙が重複している可能性が強いが、調査時には切り合いがつかめなかった。長軸500cm、短軸は南半部58cm、北半部134cmの規模をもち、検出面からの深さは中央部が最も深く38cmで、南・北両端部でそれぞれ14cm、10cmである。底面の標高は中央部で約18.80m、長軸方向は北西－南東。弥生土器甕等が出土した。弥生時代中期後半。

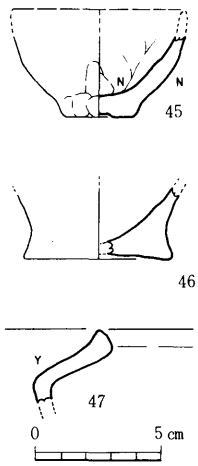


Fig. 82　第4・11・14号溝出土遺物実測図

出土遺物（Fig. 81－43・44, PL. 25－43・44）

43は「く」の字に強く屈曲する短い口縁部をもつ甕。端部は面をもつ。頸部外面には煤が付着する。内外面とも横ナデ仕上げ。44は底部で器形は37と大差ない。外底面ナデ、他は風化のため調整不明。

**溝**

10条を検出した。北東－南西に走るものが半数を占め、規模は小さい。残存状態は悪く、出土遺物も極めて少ない。

以下、主なものについて述べる。

第４号溝

調査区中央付近を北東－南西に走行する溝で、第８号竪穴住居跡を切っている。溝幅は平均約23cmで、河川跡に切られる部分付近で溝幅を増し、最大幅約4.2mとなる。断面形態は逆台形状を呈し、検出面からの深さは平均約15cm、溝幅を増す河川跡付近で最も深く25cmとなる。

出土遺物には土師器若干がある。弥生時代終末～古墳時代初頭。

出土遺物（Fig. 82－45, PL. 25－45）

口縁部を欠損する手捏ねの土師器鉢。窪み底の底部から内彎しながら開く胴部に至る。内外面ナデ仕上げで、底部側面および内面には指圧による明瞭な整形痕が残る。

第11号溝

調査区の東端部を東－西に走行する溝で、東への延長部分は削平により消失している。溝幅は約75cmで、河川跡に切られる部分で溝幅を減じ、約40cmとなる。溝底の起伏が激しく、検出面からの深さは約10～30cmである。

出土遺物には弥生土器数点がある。弥生時代中期後半。

出土遺物（Fig. 82－46, PL. 25－46）

甕の底部でわずかに上げ底。内外面とも風化のため調整不明。なお図示しなかったが、他に下垂する口縁部外面にヘラによる鋸歯文を施す壺の口縁部の破片がある。

第12号溝

調査区の南東部を南－北に走行する溝で、第11号竪穴住居跡によって切られている。溝幅は約75cm、検出面からの深さは約25cmである。２段にわたって掘削されているが、断面形は「U」字形に近い。

遺物は全く出土しておらず、時期は明らかでないが、第11号竪穴住居跡との切り合い関

係から、弥生時代中期後半を遡るものではない。

第14号溝

調査区の南端部をほぼ南－北に走行する溝で、第17号竪穴住居跡を切り、第18号竪穴住居跡に切られている。溝幅は約25cm、検出面からの深さは約４～12cmで、断面は「U」字形を呈する。

出土遺物は少なく、弥生土器若干がある。弥生時代中期後半。

出土遺物（Fig. 82－47, PL. 25－47）

いわゆる跳ね上げ口縁をもつ甕で、内外面とも横ナデ仕上げ。

**柱穴**

調査のほぼ全面で多数検出された。出土遺物から、弥生時代前期～古墳時代のもので、竪穴住居跡の主柱穴となるものも含まれていると思われるが、柱穴配置による遺構の復原はできなかった。

遺物は32個の柱穴から出土したが、図化できたのは以下の12点である。

出土遺物（Fig. 83－48～59, PL. 25－48～58・PL. 27－59）

48は甕の底部で、側面は裾広がりとなる。内底面ナデ仕上げ、他は風化のため調整不明。Ｐ１出土。

49は円盤状に突出する壺の底部で、精選された粘土を用いている。側面横ナデ、他はナデ仕上げ。Ｐ２出土。

50は直線的に外反し端部がやや肥厚する甕の口縁部。粗雑な横ナデ仕上げで端部外面は窪む。頸部外面には煤が付着する。Ｐ３出土。

51は断面台形の扁平な突帯を３条貼付する壺の胴部。調整不明。52は短く緩やかに外反する甕の口縁部で、端部にはヘラで刻目を施す。横ナデ仕上げ。ともにＰ４出土。

53は小形の甕。胴部は張らず頸部内面に稜をもたない。口縁部は外彎ぎみに開き端部に面をもつ。口縁部内外面は粗雑な横ナデ、胴部外面縦刷毛目、内面横刷毛目仕上げ。54は鉢。胴部は内彎しながら開き、頸部内面は稜をもたない。口縁部はやや長めで直線的に外反し端部は丸くおさめる。調整は丁寧で、外面は縦刷毛目仕上げの後口縁部～頸部はさらに横ナデを施す。内面は口縁部～頸部が横刷毛目の後横ナデ、胴部が刷毛目後ナデ仕上げ。ともにＰ５出土。

55は壺の底部と思われるが、風化著しく調整不明。Ｐ６出土。

57～59はどの柱穴出土か不明のもの。57は器壁の薄い平底の壺の底部。外面は側面横ナ

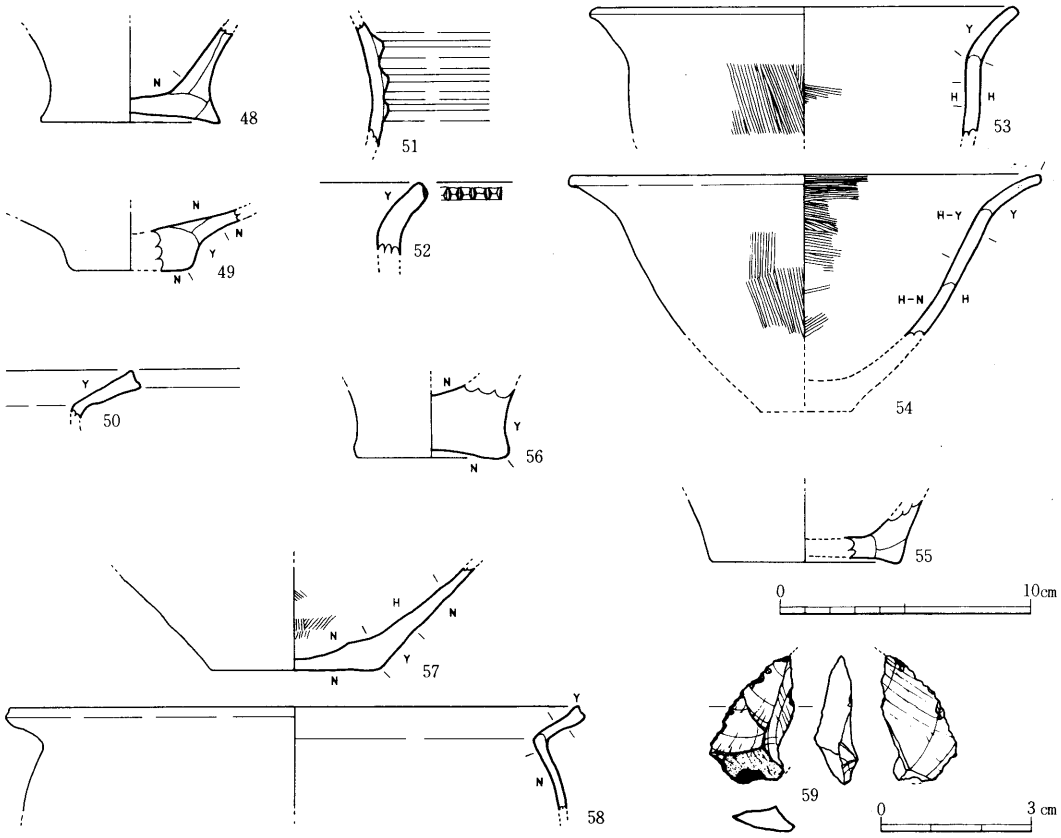
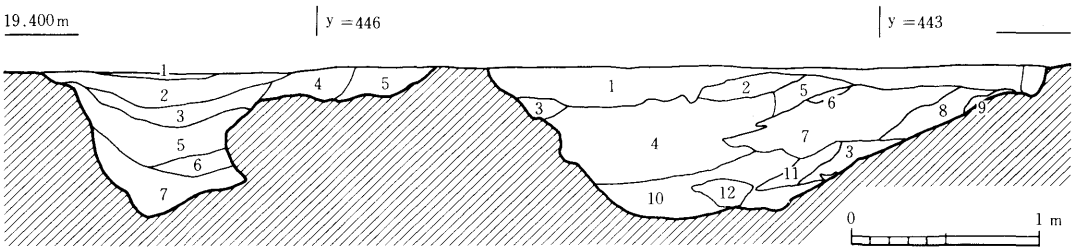



**Fig. 83** 柱穴出土遺物実測図

デ、他はナデ仕上げ。内面は底面ナデ、他は縦刷毛目仕上げ。58は甕で、「く」の字に屈曲する口縁部をもち、跳ね上げ口縁風に端部が肥厚して外面は窪む。口縁部内外面横ナデ、胴部内面ナデ仕上げ。59は正面右半部を欠損する剝片で、正面下端部には自然面を残す。正面左側縁には連続する細かな剝落痕が認められ、使用痕の可能性がある。黒曜石製。

**河川跡**（Fig. 84, PL. 23）

調査区の東側に位置し、南東から北西に走行する河川跡で、完掘はしていないが、トレンチによって規模・土層の堆積・遺物の出土状況等を確かめた。幅約2.6～4.5m、検出面からの深さ約55～80cmの規模をもち、北端部に比べて南端部での底面の起伏が激しい。2条に重複する部分を調査当初は第1・2号河川跡としたが、検出時の平面観察、また中央よりやや南に設定したトレンチでの土層堆積状況の所見でも切り合いが認められなかったことから、同一河川の本流・支流と考える。支流は幅約1.4～2.0m、検出面からの深さ約




第1号河川跡
1 淡灰茶色土
2 暗灰橙色粘質土
3 暗灰色粘質土
4 濁茶灰色粘質土
5 暗茶褐色粘質土
6 黒灰色粘質土
7 淡黄灰色小礫混じり粗砂土

第2号河川跡
1 淡灰橙色土
2 灰色細砂土
3 淡青灰色細砂土
4 灰色小礫混じり砂土
(黒色粘土をブロック状に含む)
5 淡灰色砂質土
6 灰白色砂土
7 淡青灰色砂質土
8 暗灰橙色粘質土
9 黒褐色粘土
10 灰茶色小礫混じり粗砂土
11 灰色砂土
12 黒色粘土

Fig. 84 第1・2号河川跡土層断面図

35～80cmの規模をもつ。埋土は砂質土・砂礫が主体で、洪水等による埋没を窺わせる。

出土遺物には弥生土器・土師器・須恵器・円盤状石製品等があるが、量的には須恵器の占める割合が圧倒的に多い。また最下部から須恵器甕（Fig. 86－77・78)、昭和61年度の調査で最上層から全形を知りうる須恵器坏身が出土しており、この河川跡が機能していたのは古墳時代後期～奈良時代と推察される。

出土遺物（Fig. 85・86－60～80, PL. 25・26－60～79・PL. 27－69・80)

弥生土器（60～67)

60～62は壺。60はいわゆる鋤先状口縁をもつもので、拡張部は下垂する。口縁端部の内側への張り出しは弱い。内面横ナデ、外面風化のため調整不明。61は肩部で、削り出しによる段をもつ。外面横ナデ、内面調整不明。62は頸部で、ヘラによる2条の浅い沈線が巡る。内面ナデ仕上げ、外面調整不明。

63～65は甕。63・64は短く緩やかに外反する口縁部をもつもの。64は口縁部の開きが小さく、端部にはヘラによる刻目を施す。いずれも内外面横ナデ仕上げ。65は上げ底の底部で、内面には指圧による整形痕が残る。側面横ナデ、他はナデ仕上げ。

66・67は高坏の脚部で裾部を欠損する。67は坏部に脚部を挿入する。67の外面を除いていずれもナデ仕上げ。

土師器（68・69)

68は器壁が厚く、中位付近に屈曲部をもつと思われる小形の高坏の脚部。内面はシボリ痕を残し、ナデ仕上げ。外面調整不明。69はほぼ完形に近い高坏。内彎して立ち上がる埦

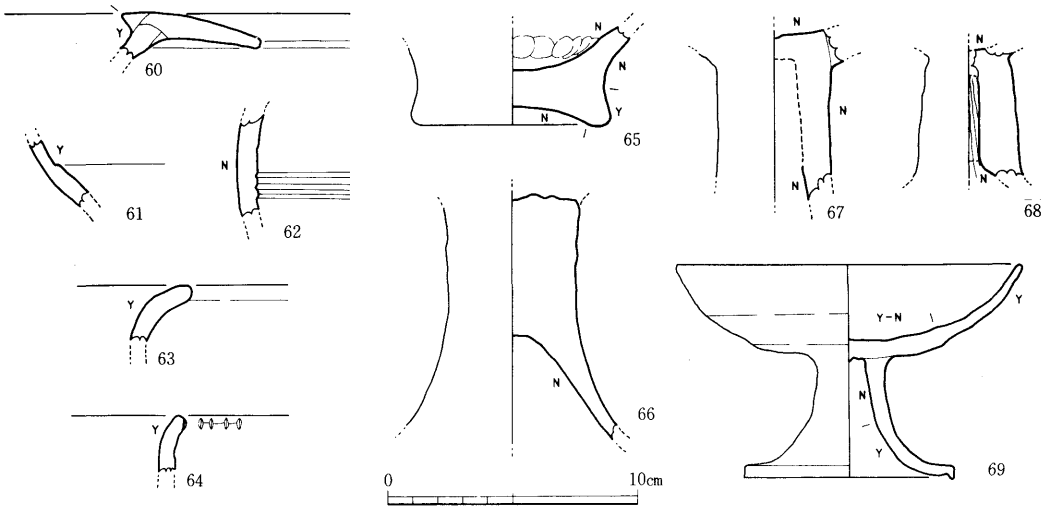



Fig. 85　第１・２号河川跡出土遺物実測図(1)

状の浅い坏部をもつ。脚部は短く、坏部との接合部付近から屈曲することなく緩やかに開く。脚端部は須恵器坏蓋の口縁部同様、鳥嘴状に屈曲する。脚部内面上半は静止ナデ、他は回転ナデを施すが、坏部内面下半はさらに静止ナデを施す。

須恵器（70～79）

70～72は坏蓋。70は丸い体部をもち、口縁部は上方へ反り上がる。口縁端部は尖り気味で、内面には面をもたない。71は直線的にのびる体部をもつ。口縁端部は垂直に屈曲し、断面形は鳥嘴状となる。いずれも内外面回転ナデ調整。72は天井部にボタン状の撮みをもつ。内外面とも回転ナデで、その後、撮み部内外面は静止ナデを施す。

73～76は坏身。73は口縁部で体部は直線的に立ち上がる。口縁端部は丸くおさめる。内外面回転ナデ調整。74～76は底部で、底部と体部の境より内側に高台を貼付する。74・75はほぼ直立する高台をもつが、75は扁平で端部が窪む。76は盤状で、高台は外下方へ「ハ」の字に開く。75・76は高台内側端が接地する。74～76とも体部～高台付近の外面と体部内面は回転ナデ、外底面中央部および内底面は静止ナデ。

77・78は甕。77は外彎気味に開く口縁部をもち、端部は水平に近い。胴部と口縁部との接合部は、外面に粘土帯を貼付して補強する。口縁部内外面は回転ナデ調整。胴部は内面に同心円文が残り、外面にタタキが施されたと思われるが、カキ目により消失している。78は胴長の胴部から底部にかけてのもので、外面には上半部と下半部で方向の異なる平行タタキを行なった後、粗いカキ目を施す。内面には同心円文が残る。外面には自然釉が付

Fig. 86　第１・２号河川跡出土遺物実測図(2)

着する。

79は高坏の坏部。口縁部は外彎しながら開き、端部は尖りぎみにおさめる。口縁部と体部との境に三角突帯を貼付し、その直下に7条単位の波状文が巡る。内外面とも回転ナデ調整。

石製品（80）

正面上端部を欠損する、いわゆる円盤状石製品である。正面右側縁の一部を除いてほぼ全周縁に正裏両面からの剝離痕が認められる。裏面上半部には左右方向の擦痕が残存する。四熊ヶ岳産の角閃石安山岩製。

**遺構に伴わない遺物**（Fig. 84・89－81～125, PL. 26－81～124）

1）攪乱壙出土遺物（Fig. 87－81～91, PL. 26－81・85・88・PL. 27－90・91）

弥生土器（81～88）

81～84は壺。81は直立ぎみに外彎しながら開く口縁部をもつ。口縁部外面ナデ、内面横刷毛目の後ナデ、胴部外面ナデ仕上げ。82～84は底部で、安定した平底（82・83）と底径の小さい不安定な平底（84）とがある。82・83は内外底面ナデ、側面は風化のため調整不明であるが、82は側面までナデて仕上げる。84は外面縦刷毛目仕上げで外底面はさらにナデる。内面は刷毛目仕上げ。

85～87は甕。85は頸部内面に稜をもって直線的に短く「く」の字に外反する口縁部をもつ。胴部最大径は口径を上回る。口縁部外面と胴部外面下半には煤が付着する。口縁部内外面横ナデ、胴部内外面ナデ仕上げ。86・87は底部で、胴部からそのまま底部に移行するもの（86）と底部側面が斜下方へ反るやや上げ底のもの（87）とがある。86は外底面・側面横ナデ、胴部外面縦刷毛目、内面ナデ仕上げ。87は風化のため調整不明。

88は高坏。脚柱部は中空で、直線的に下方へ開く。坏部との接合部よりやや下位の外面には赤色顔料の痕跡が認められる。脚部外面縦刷毛目、他はナデ仕上げ。

土師器（89）

小形の高坏の脚上半部と思われ、坏部との接合部付近から緩やかに開く。3ヵ所に穿孔をもつものであろう。風化著しく調整不明。

石製品（90・91）

河原石等の転礫を素材とした棒状の敲石で、上端部（頭部）に敲打痕、下端部に潰痕が認められる。91は敲打・潰痕とも著しく、火熱による焼痕が右側面・裏面を中心としたほぼ全面にみられる。また正面・上面にはタール状の付着物がある。

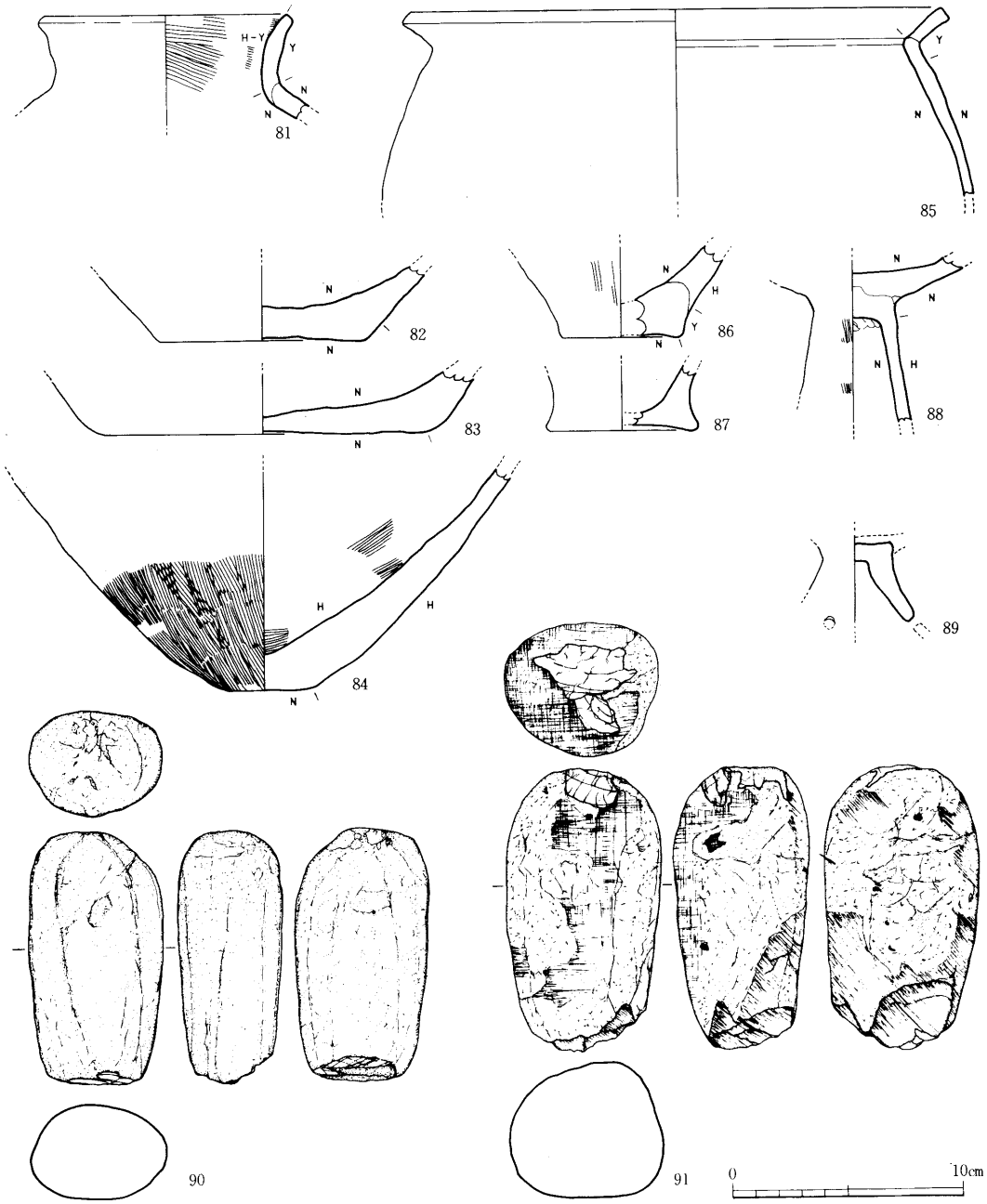



Fig. 87　攪乱壙出土遺物実測図

2）トレンチ出土の遺物（Fig. 88－92～110, PL. 26－93～96・107・PL. 27－108～110）

昭和42年、吉田遺跡調査団による範囲確認調査の際に設定したトレンチからの出土遺物であるが、包含層出土のものか遺構出土のものか判然としないため、一括して取り扱う。

弥生土器（92～106）

92～97は壺。92は口縁部が下垂し、拡張部外面にヘラによる2条単位の鋸歯文を施す。93はいわゆる鋤先状口縁をもつもの。92・93とも内外面横ナデ仕上げ。94は台付壺の脚台部で、直線的に裾部へ開く。端部付近横ナデ、他はナデ仕上げ。

95・96は甕で、「く」の字に外反する口縁部をもち、頸部内面は強い横ナデあるいはナデのため面をなす。95は胴部最大径が口径に近く、胴部と頸部の境付近は外面の強い横ナデによって内側へ屈曲する。口縁部・頸部内外面横ナデ、胴部外面縦刷毛目、内面粗雑なナデ仕上げ。96は口縁端部が肥厚し、外面が窪む。口縁部内外面・頸部外面横ナデ、胴部外面縦刷毛目、頸部・胴部内面ナデ仕上げ。

97～106は底部。97は壺で平底に近い。側面横ナデ、外底面・内面ナデ仕上げ。98～105は甕。上げ底で底部側面が斜方へ反るものが大半であるが、垂直に近いもの（98・101）もある。103は小形の甕で台状の底部に内彎して立ち上がる胴部をもつ。調整は側面横ナデ、外底面・胴部外面・内面をナデるものが多い。106は手捏ねの鉢で、胴部外面・内面には指圧による粗雑な整形痕が認められる。外底面ナデ、側面横ナデ仕上げ。

土師器（107）

張りの強い胴部から外彎しながら「く」の字に屈曲する口縁部をもち、端部は丸くおさめる。口縁部内外面横ナデ、胴部外面縦刷毛目、内面粗雑なナデ仕上げ。

石製品（108・109）

108は円礫素材の敲石で、約3/4を欠損する。側面中央部よりやや上位に敲打痕が認められる。デイサイト製。

109は大形の石庖丁の再加工品で、上端部に第一次製品時の穿孔が残存する。正面右側縁は欠損時の折れ面がそのまま放置されているが、他の周縁には正裏両面からの加工が施されている。特に裏面左側縁・下縁には連続する細かな剥離作業が行なわれ、刃部が造出されている。なお上縁の加工は粗雑であるが、剥離面の傾斜角度からみて、刃部としての機能は充分果たしうるものと考えられる。讃岐岩質安山岩製。

その他（110）

横長剥片で、加工痕は認められない。正面は不定方向からの加撃による剥離面によって

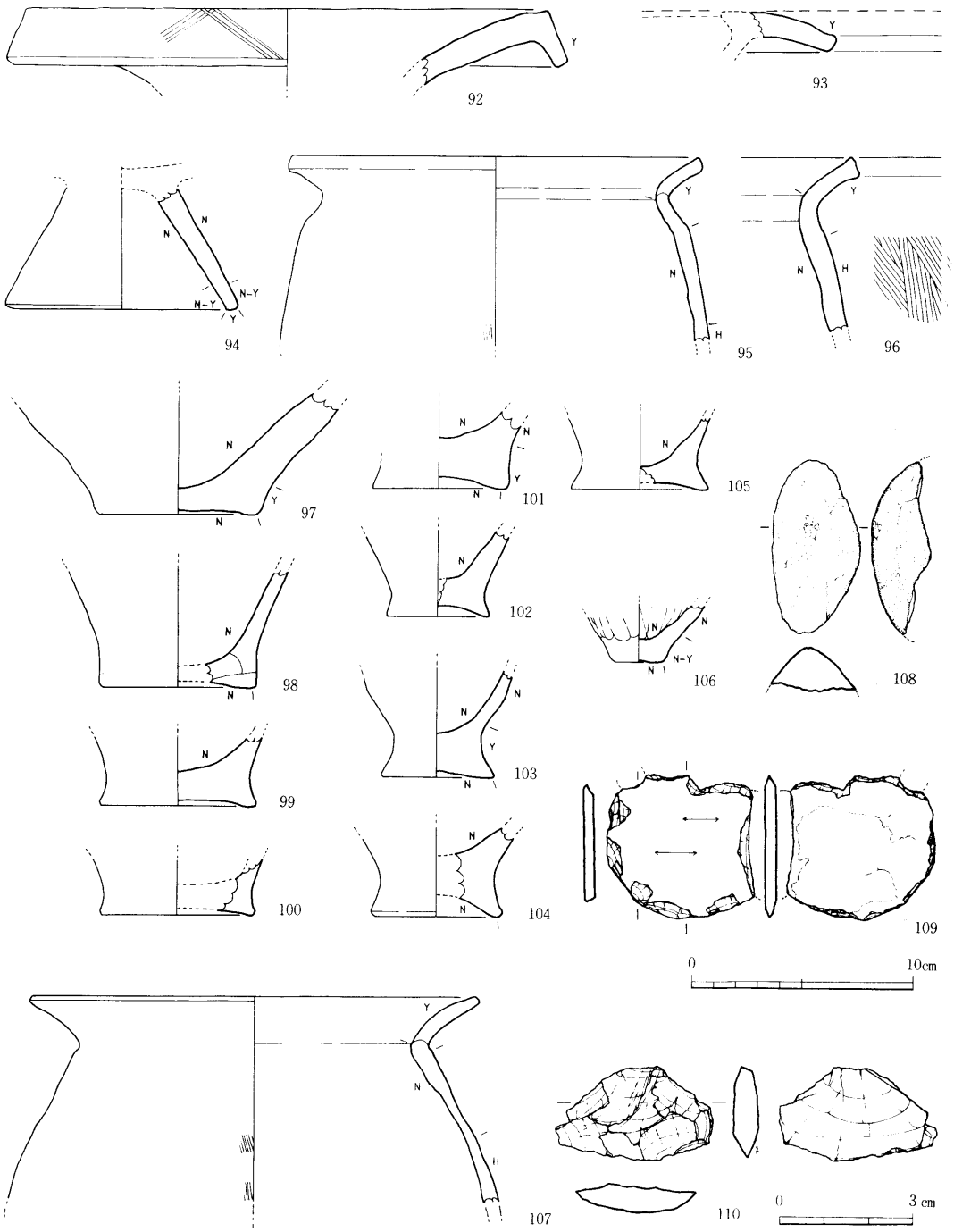



Fig. 88　トレンチ出土遺物実測図

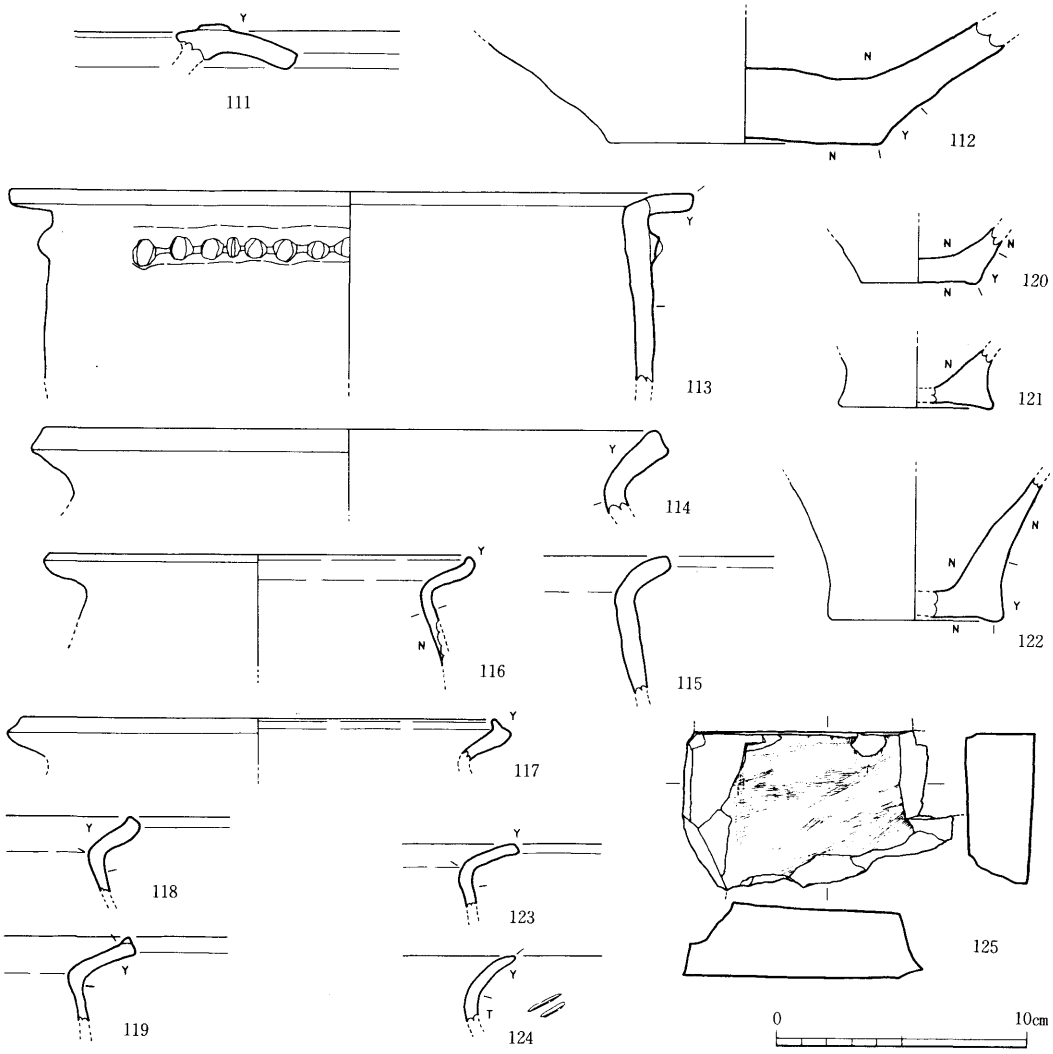



Fig. 89　出土状況不明の遺物実測図

構成され、裏面は主要剝離面である。打点は認められない。硝子質安山岩製。

3）出土状況不明の遺物（Fig. 89－111～125, PL. 26－111・113・124・PL. 27－125）

弥生土器（111～122）

111・112は壺。111はいわゆる鋤先状口縁をもつもので、口縁部は彎曲しながら下垂し、内側寄りに円形浮文を貼付する。内外面横ナデ仕上げ。112は器壁の厚い大形の壺の底部で、安定した平底。側面横ナデ、外底面・内面ナデ仕上げ。

## Tab. 8　出土土器観察表

法量（　）は復原値

| 番号 | 器種 | 法　量（cm）<br>（①口径 ②底径 ③器高） | 色　調<br>（①外面 ②内面） | 胎　土 | 焼　成 | 備　考 |
|---|---|---|---|---|---|---|
| | SB 9 | | | | | |
| 1 | 壺 | ①(36.8) | にぶい橙色(2.5YR6/3) | やや不良 | 良　好 | 口縁外面鋸歯文 |
| 2 | 壺 | ②(7.4) | 黒褐色(10YR3/1) | やや不良 | 良　好 | 底部1/2破片 |
| 3 | 甕 | | 灰褐色(5YR6/2) | 不　良 | やや不良 | 口縁片 |
| 4 | 高坏 | | 橙色(2.5YR6/6) | 精　良 | 良　好 | 脚部 |
| 5 | 甕 | | にぶい橙色(5YR7/4) | 不　良 | 良　好 | 把手 |
| 6 | 有翼支脚 | | にぶい橙色(2.5YR6/3) | 不　良 | 良　好 | 翼部 |
| | SB11 | | | | | |
| 8 | 甕 | | にぶい橙色(5YR7/3) | 良　好 | 良　好 | 口縁部外面に煤付着 |
| 9 | 甕 | | ①橙色(2.5YR6/6)　②褐灰色(7.5YR5/1) | 良　好 | 良　好 | 頭部～胴上半片 |
| 10 | 甕 | ②(7.2) | ①にぶい橙色(7.5YR6/4)　②褐灰色(5YR5/1) | 不　良 | 不　良 | 底部1/5破片 |
| 11 | 甕 | ②(4.2) | ①にぶい橙色(5YR6/3)　②褐灰色(7.5YR5/1) | やや不良 | 良　好 | 底部1/4破片 |
| | SB12 | | | | | |
| 12 | 甕 | ②6.6 | ①橙色(2.5YR7/8)　②黒褐色(7.5YR3/1) | 不　良 | 良　好 | 底部 |
| 13 | 甕 | | にぶい橙色(5YR6/4) | 良　好 | やや不良 | 口縁片 |
| 14 | 土師器高坏 | | ①淡赤橙色(2.5YR7/4)　②暗赤褐色(5YR3/2) | 不　良 | 良　好 | 坏部片 |
| | SB13 | | | | | |
| 15 | 甕 or 壺 | | にぶい橙色(5YR7/4) | 良　好 | 良　好 | 口縁片 |
| 16 | 甕 | | にぶい橙色(7.5YR7/4) | 良　好 | 良　好 | 口縁片 |
| 17 | 甕 | ②3.4 | 黒褐色(10YR3/1) | 良　好 | 良　好 | 底部 |
| 18 | 土師器甕 | | 橙色(5YR7/8) | 不　良 | 不　良 | 口縁片 |
| | SB18 | | | | | |
| 19 | 甕 | | ①にぶい赤褐色(5YR5/3)　②にぶい褐色(7.5YR6/3) | 良　好 | 良　好 | 口縁端部2条の凹線 |
| 20 | 甕 | ②5.6 | ①淡赤橙色(2.5YR7/4)　②にぶい黄橙色(10YR7/2) | 不　良 | 良　好 | 底部 |
| 21 | 甕 | ②(7.4) | ①橙色(2.5YR7/6)　②浅黄橙色(10YR8/3) | 不　良 | 良　好 | 底部1/5破片 |
| 22 | 土師器鉢 | ①(17.6)③7.5 | にぶい橙色(5YR6/4) | 不　良 | 良　好 | 1/2破片 |
| | SK30 | | | | | |
| 23 | 甕 | ②8.2 | 橙色(5YR7/6) | 良　好 | 良　好 | 底部 |
| 24 | 高坏 | | ①赤橙色(10R6/6)　②褐灰色(7.5YR5/1) | 精　良 | 良　好 | 脚部片 |
| 25 | 高坏 | | ①浅黄橙色(10YR8/3)　②灰色(N 4/0) | 不　良 | 不　良 | 脚部 |
| | SK31 | | | | | |
| 26 | 壺 | | ①灰白色(10YR8/2)　②橙色(2.5YR7/6) | 良　好 | 不　良 | 口縁片 |
| 27 | 壺 | ②(9.0) | ①にぶい橙色(5YR7/3)　②灰色(N 6/0) | 良　好 | 良　好 | 底部1/3破片 |
| 28 | 甕 | ②(7.0) | ①赤橙色(10R6/8)　②にぶい橙色(7.5YR7/3) | 良　好 | やや不良 | 底部1/5破片 |

法量（　）は復原値

| 番号 | 器種 | 法量（cm）（①口径 ②底径 ③器高） | 色調（①外面 ②内面） | 胎土 | 焼成 | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|
| | SK33 | | | | | |
| 29 | 壺 | | 灰白色(7.5YR8/2) | やや不良 | 良好 | 肩部外面に有軸羽状文 |
| 30 | 甕 | ②(5.6) | ①灰白色(5YR8/2) ②淡橙色(5YR8/3) | 良好 | 良好 | 底部1/3破片 |
| | SK36 | | | | | |
| 31 | 甕 | ①(18.8) | ①黒褐色(5YR3/1) ②にぶい赤褐色(2.5YR5/4) | 不良 | 良好 | 胴部外面叩き |
| | SK39 | | | | | |
| 32 | 土師器壺 | ①16.0 | 赤橙色(10R6/8) | 精良 | やや不良 | 口縁部 |
| 33 | 土師器壺 or 甕 | ②3.2 | ①にぶい橙色(5YR7/3) ②褐灰色(5YR5/1) | 良好 | 良好 | 底部 |
| 34 | 土師器壺 | ②4.0 | 灰色(5Y5/1) | 良好 | やや不良 | 突出する底部 |
| 35 | 土師器高坏 | ①(17.6) | にぶい黄橙色(10YR7/2) | 精良 | やや不良 | 坏部1/5破片 |
| | SK44 | | | | | |
| 36 | 甕 | | 灰白色(5YR8/2) | やや不良 | 良好 | 口縁片 |
| 37 | 甕 | ②(8.2) | 淡赤橙色(2.5YR7/4) | 不良 | やや不良 | 底部1/5破片 |
| 38 | 高坏 | | 淡赤橙色(2.5YR7/4) | 良好 | 良好 | 脚裾部片 |
| | SK45 | | | | | |
| 39 | 壺 | | ①淡黄色(2.5Y8/4) ②灰色(N 5/0) | 良好 | 不良 | 胴部片 |
| 40 | 甕 | | ①にぶい橙色(2.5YR6/4) ②明褐灰色(5YR7/1) | 精良 | 良好 | 口縁片 |
| | SK46 | | | | | |
| 42 | 甕 | ①(22.0) | 赤灰色(2.5YR5/1) | 良好 | 良好 | 胴上半部外面に媒付着 |
| | SK49 | | | | | |
| 43 | 甕 | | 赤灰色(10R5/1) | 不良 | 良好 | 頸部外面媒付着 |
| 44 | 甕 | ②(7.8) | ①にぶい橙色(5YR6/4) ②明褐灰色(5YR7/2) | 精良 | 良好 | 底部1/4破片 |
| | SD 4 | | | | | |
| 45 | 土師器手捏ね土器鉢 | ②(2.6) | 橙色(2.5YR7/6) | 良好 | やや不良 | 底部 |
| | SD11 | | | | | |
| 46 | 甕 | ②(5.8) | ①にぶい橙色(5YR7/3) ②褐灰色(10YR4/1) | やや不良 | やや不良 | 底部 |
| | SD14 | | | | | |
| 47 | 甕 | | ①にぶい橙色(5YR7/3) ②赤橙色(10R6/8) | 不良 | やや不良 | 口縁片 |
| | P 1 | | | | | |
| 48 | 甕 | ②(7.0) | ①暗灰色(N 3/0)②灰白色(2.5Y8/1)（側）明褐灰色(5YR7/2) | 不良 | 良好 | 底部1/2破片 |
| | P 2 | | | | | |
| 49 | 甕 | ②(4.4) | ①にぶい黄橙色(10YR7/2) ②明褐灰色(7.5YR7/1) | 精良 | 良好 | 突出する底部 |
| | P 3 | | | | | |
| 50 | 甕 | | ①褐灰色(5YR4/1) ②灰白色(5YR8/1) | 良好 | 良好 | 口縁片 |
| | P 4 | | | | | |
| 51 | 壺 | | 淡橙色(5YR8/4) | やや不良 | やや不良 | 胴部片 |
| 52 | 甕 | | 赤色(10R5/8) | 良好 | やや不良 | 口唇部外面刻目 |

法量（　）は復原値

| 番号 | 器種 | 法量（cm）(①口径 ②底径 ③器高) | 色調 (①外面 ②内面) | 胎土 | 焼成 | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|
| | P5 | | | | | |
| 53 | 甕 | ①(16.6) | ①灰白色(7.5YR8/2) ②灰白色(10YR8/1) | 精良 | 良好 | 口縁1/6破片 |
| 54 | 鉢 | ①(18.6) | 褐灰色(10YR6/1) | 良好 | 良好 | 口縁1/4破片 |
| | P6 | | | | | |
| 55 | 壺か | ②(7.4) | ①灰褐色(5YR6/2) ②褐灰色(7.5YR6/1) | やや不良 | 良好 | 底部1/6破片 |
| | P7 | | | | | |
| 56 | 甕 | ②(5.8) | ①赤橙色(10R6/8) ②灰白色(2.5Y7/1) | 良好 | 良好 | 底部 |
| | P不明 | | | | | |
| 57 | 壺 | ②6.6 | にぶい橙色(7.5YR7/4) | 良好 | やや不足 | 底部 |
| 58 | 甕 | ①(22.6) | 浅黄色(2.5Y7/3) | 良好 | やや不良 | 口縁1/4破片 |
| | 河川跡 | | | | | |
| 60 | 壺 | | にぶい橙色(5YR7/3) | やや不足 | 良好 | 口縁片 |
| 61 | 壺 | | ①暗赤褐色(5YR3/3) ②にぶい赤褐色(2.5YR4/3) | 良好 | 良好 | 肩部片 |
| 62 | 壺 | | 灰白色(10YR8/2) | 不良 | 不良 | 胴部片 |
| 63 | 甕 | | ①褐色(7.5YR4/3) ②にぶい黄橙色(10YR7/2) | 良好 | やや不良 | 口縁片 |
| 64 | 甕 | | 黒褐色(7.5YR3/2) | 良好 | 良好 | 口唇部に刻目 |
| 65 | 甕 | ②7.2 | ①赤橙色(10R6/8) ②暗灰色(N3/0) | 不良 | 良好 | 底部 |
| 66 | 高坏 | | ①明褐灰色(7.5YR7/1) ②灰色(5Y6/1) | 不良 | 良好 | 脚部1/2破片 |
| 67 | 高坏 | | にぶい橙色(7.5YR7/3) | 良好 | 良好 | 脚部 |
| 68 | 土師器高坏 | | にぶい橙色(5YR7/3) | 良好 | 不良 | 脚部1/2破片 |
| 69 | 土師器高坏 | ①13.8 ②8.5 ③8.4 | 灰白色(N 8/0) | 精良 | 良好 | ほぼ完形 |
| 70 | 須恵器坏蓋 | | 明緑灰色(10GY7/1) | 良好 | 良好 | 口縁片 |
| 71 | 須恵器坏蓋 | | 灰白色(N 8/0) | 良好 | やや不良 | 口縁片 |
| 72 | 須恵器坏蓋 | | ①暗青灰色(10BG4/1) ②青灰色(10BG6/1) | やや不良 | 良好 | 撮み部 |
| 73 | 須恵器坏身 | | ①青灰色(5B5/1) ②青灰色(10BG6/1) | 良好 | 良好 | 口縁片 |
| 74 | 須恵器坏身 | ②(7.4) | 淡黄色(2.5Y8/3) | 良好 | 良好 | 底部 |
| 75 | 須恵器坏身 | ②(6.8) | 青灰色(10BG6/1) | 良好 | 良好 | 底部1/6破片 |
| 76 | 須恵器坏身 | ②(11.6) | 青灰色(5PB6/1) | やや不良 | 良好 | 底部1/5破片 |
| 77 | 須恵器 甕 | ①(18.0) | 明青灰色(5PB7/1) | 良好 | 良好 | 口縁～胴部1/5破片 |
| 78 | 須恵器 甕 | | 灰白色(7.5Y7/1) | 良好 | 不良 | 胴下半部1/5破片 |
| 79 | 須恵器高坏 | | 暗青灰色(5B3/1) | 精良 | やや不良 | 口縁部下外面7条の波状文 |
| | 攪乱壙 | | | | | |
| 81 | 壺 | ①(10.4) | 浅黄橙色(7.5YR8/3) | 精良 | 良好 | 口縁1/4破片 |
| 82 | 壺 | ②(8.8) | ①灰白色(10YR8/2) ②灰褐色(5YR4/2) | 良好 | 良好 | 底部1/3破片 |
| 83 | 壺 | ②(13.8) | 灰白色(10YR8/2) | 良好 | 良好 | 底部1/3破片 |
| 84 | 壺 or 甕 | ②(2.8) | ①灰黄褐色(10YR5/2) ②淡黄色(2.5Y8/3) | 良好 | 良好 | 底部1/3破片 |
| 85 | 甕 | ①(22.7) | 明赤褐色(2.5YR5/6) | やや不良 | 堅緻 | 口縁1/6破片 |

法量（　）は復原値

| 番号 | 器種 | 法量（cm）(①口径 ②底径 ③器高) | 色調（①外面 ②内面） | 胎土 | 焼成 | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|
| 86 | 壺 or 甕 | ②(5.0) | 黄橙色(10YR8/6) | 不良 | 良好 | 底部1/4破片 |
| 87 | 甕 | ②(6.2) | にぶい橙色(5YR7/4) | 不良 | 良好 | 底部1/5破片 |
| 88 | 高坏 | | 褐灰色(7.5YR6/1) | 良好 | 良好 | 坏底～脚部片、外面丹塗 |
| 89 | 高坏 | | にぶい橙色(2.5YR6/4) | 良好 | やや不良 | 脚部 |
| | トレンチ | | | | | |
| 92 | 壺 | ①(23.3) | にぶい黄橙色(10YR7/3) | 良好 | 良好 | 口縁部外面2条単位の鋸歯文 |
| 93 | 壺 | | にぶい橙色(5YR7/3) | 良好 | 良好 | 口縁片 |
| 94 | 台付壺 | ②(9.4) | 灰黄色(2.5Y7/2) | 良好 | 良好 | 脚部1/5破片 |
| 95 | 甕 | ①(18.2) | 灰褐色(7.5YR5/2) | 良好 | 良好 | 口縁1/6破片 |
| 96 | 甕 | | 灰褐色(5YR5/2) | 不良 | 良好 | 口縁片、端部肥厚 |
| 97 | 壺 | ②(7.0) | ①にぶい橙色(7.5YR7/3) ②黄灰色(2.5Y5/1) | 良好 | 精良 | 底部1/5破片 |
| 98 | 壺(?) | ②(6.6) | 灰褐色(7.5YR6/2) | 良好 | 良好 | 底部1/5破片 |
| 99 | 甕 or 壺 | ②(6.9) | にぶい橙色(5YR7/3) | 精良 | やや不良 | 底部1/4破片 |
| 100 | 甕 | ②(6.8) | にぶい橙色(5YR7/4) | 良好 | 不良 | 底部1/6破片 |
| 101 | 甕 | ②6.0 | ①橙色(2.5YR6/8) ②灰褐色(5YR5/2) | 不良 | 良好 | 底部 |
| 102 | 甕 | ②(4.6) | ①にぶい橙色(5YR6/3) ②明緑灰色(10GY7/1) | 良好 | 不良 | 底部1/4破片 |
| 103 | 甕 | ②(4.8) | ①にぶい橙色(7.5YR7/4) ②にぶい黄橙色(10YR7/4) | 良好 | 良好 | 底部 |
| 104 | 甕 | ②(5.6) | ①橙色(2.5YR6/8) ②灰褐色(7.5YR6/2) | 良好 | 良好 | 底部1/7破片 |
| 105 | 甕 | ②(6.2) | ①橙色(2.5YR7/6) ②褐灰色(10YR5/1) | 良好 | 良好 | 底部1/3破片 |
| 106 | 手捏ね土器 | ②2.1 | 橙色(2.5YR7/6) | 精良 | やや不良 | 底部 |
| 107 | 土師器　甕 | ①(19.8) | にぶい黄橙色(10YR7/2) | 不良 | 不良 | 口縁1/5破片 |
| | 出土状況不明 | | | | | |
| 111 | 壺 | | にぶい橙色(5YR7/4) | 良好 | 不良 | 鋤先状口縁片 |
| 112 | 壺 | ②(10.6) | ①にぶい橙色(5YR7/4) ②黄色(5Y8/6) | 不良 | 良好 | 底部1/3破片 |
| 113 | 甕 | ①(27.4) | ①浅黄橙色(7.5YR8/3) ②灰白色(10YR8/2) | 不良 | 不良 | 口縁1/6～1/7破片 |
| 114 | 甕 | ①(24.4) | 灰白色(2.5Y8/2) | やや不良 | 良好 | 口縁1/6破片 |
| 115 | 甕 | | ①にぶい橙色(5YR6/3) ②灰黄褐色(10YR4/2) | 不良 | 良好 | 口縁片 |
| 116 | 甕 | ①(16.9) | 灰褐色(7.5YR4/2) | やや不良 | やや不良 | 口縁1/6～1/7破井 |
| 117 | 甕 | ①(18.8) | ①にぶい黄橙色(10YR7/2) ②黒色(10YR1.7/1) | 良好 | 良好 | 底部1/7破片 |
| 118 | 甕 | | 黒褐色(2.5Y3/1) | 精良 | 良好 | 口縁片 |
| 119 | 甕 | | 浅黄色(2.5Y7/3) | 良好 | 良好 | 口縁片 |
| 120 | 甕 | ②(4.6) | ①赤色(10R5/6) ②黒褐色(2.5Y3/1) | 不良 | 不良 | 底部1/3破片 |
| 121 | 甕 | ②(6.0) | にぶい橙色(5YR7/4) | やや不良 | 良好 | 底部1/4破片 |
| 122 | 甕 | ②(6.6) | ①灰白色(10YR8/2) ②暗灰色(N 3/0) | 良好 | 良好 | 底部1/5破片 |
| 123 | 土師器　甕 | | にぶい橙色(5YR7/4) | 良好 | 良好 | 口縁片 |
| 124 | 土師器　甕 | | 褐灰色(7.5YR6/1) | やや不良 | 良好 | 口縁片 |

Tab. 9 出土石器観察表

( ) は現存値

| No. | 器　種 | 最大長(cm) | 最大幅(cm) | 最大厚(cm) | 重量(g) | 石　質 | 備　考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| SB 9 | | | | | | | |
| 7 | ナイフ形石器 | (4.2) | 1.9 | 0.7 | (6.2) | メノウ | |
| SK45 | | | | | | | |
| 41 | 砥石 | (3.9) | 5.2 | 2.0 | (66.3) | 凝灰岩 | |
| P不明 | | | | | | | |
| 59 | 剥片 | (2.5) | (1.7) | 0.5 | (1.6) | 黒曜石 | |
| 河川跡 | | | | | | | |
| 80 | 円盤状石製品 | (5.3) | 6.0 | 1.1 | (41.8) | 角閃石安山岩(四熊ケ岳産) | |
| 攪乱壙 | | | | | | | |
| 90 | 敲石 | (10.9) | 5.8 | 4.0 | (519.4) | 緑色片岩 | |
| 91 | 敲石 | (12.1) | 6.7 | 5.7 | (672.0) | 花崗閃緑岩 | 火熱を受ける。付着物あり |
| トレンチ | | | | | | | |
| 108 | 敲石 | (7.7) | (2.6) | (2.0) | (65.9) | デイサイト | |
| 109 | 石庖丁 | (6.4) | (6.6) | 0.5 | (36.5) | 讃岐岩質安山岩 | 大形石庖丁の再加工品 |
| 110 | 剥片 | 2.1 | 3.4 | 0.6 | 3.9 | 硝子質安山岩 | |
| 出土状況不明 | | | | | | | |
| 125 | 砥石 | (6.3) | (10.8) | 3.0 | (317.5) | 流紋岩質溶結凝灰岩 | |

113～122は甕。113は胴部の張りが極めて弱く、逆「L」字状に強く屈曲する口縁部をもち、端部は面を有する。頸部直下の外面には指圧による粗雑な刻目を施した貼付突帯が巡る。口縁部から突帯のやや下位までの外面は横ナデ、他は風化のため調整不明。114は口縁端部が肥厚し、面をもつ。内外面横ナデ仕上げ。116～119は跳ね上げ口縁をもつもので、口縁端部が内彎するもの（116)、直線的にのびるもの（119）などがあるが、端部外面はいずれも面を有する。117は跳ね上げが顕著で、口縁端部は肥厚する。116～119とも口縁部・頸部内外面は横ナデで、116は胴部内面ナデ仕上げ。120～122は底部。底部側面が胴部からそのまま移行するもの（120)、斜下方へ反るもの（121)、垂直に下降するもの（122）がある。側面横ナデ、外底面・内面はナデるものが多い。

土師器（123・124)

2点とも甕で、123は直線的に「く」の字に屈曲する口縁部をもち、端部はさらに外反する。124は口縁部が外彎しながら開き端部は尖る。いずれも口縁部内外面横ナデで、124は頸部下外面に右上がりのタタキを施す。

石製品（125)

正面の一部を研砥面とする砥石で、上端部・裏面は節理面である。研砥は不定方向から行なわれるが、正面左上方から右上方への擦過は認められない。流紋岩質溶結凝灰岩製。

## 4　小結

昭和59年度の調査で検出した遺構は、上述したように竪穴住居跡10棟、土壙19基、溝10条、河川跡のほか柱穴多数である。

竪穴住居は弥生時代中期前半（第10号竪穴住居跡）、中期後半（第９・11号竪穴住居跡）、後期後半（第８号竪穴住居跡）、後期終末（第18号竪穴住居跡）、古墳時代中期（第12･13号竪穴住居跡）の５時期のものが検出された。

平面形態は、中期のものはすべて円形（第９～11・14・15・17号竪穴住居跡）である。弥生時代の竪穴住居が、方形から円形へと移行する前期後半～末頃を平面形態変化の第一の画期とするならば、第二の画期として捉えられる、宇部市北迫遺跡・防府市大崎遺跡等のような、円形から再び方形へと変化する中期後半段階の方形住居は検出されていない。

後期後半～終末は、円形・方形の両形態が混在（第８・18号竪穴住居跡）し、椹野川以東の趨勢と一致する。５世紀後半の住居は、方形（第13号竪穴住居跡）・隅丸長方形（第12号竪穴住居跡）の方形系統２種がみられる。

床面積は、中期後半の住居が31～48㎡の規模をもち、特に中期後半の第９号竪穴住居跡は、48㎡と同時期の住居としては県内でも有数の規模をもつ。椹野川・佐波川・阿武川流域では、中期前半以降住居規模が大形化し、床面積が20㎡前後の一群に加えて、約45㎡前後のものが出現する。この大形化は中期後半にピークに達する[5]ことから、第９号住居跡も大形化した住居例と捉えることができよう。

後期後半の第８号竪穴住居跡は床面積約25.5㎡で、椹野川流域の同時期の方形住居の中でも最大の規模である。朝田墳墓群第Ⅱ地区[6]の各住居を含めると、椹野川流域は床面積約12～25㎡のもので占められ、右田・一丁田遺跡[7]、井上山遺跡[8]等、佐波川流域の方形住居群とほぼ同一規模をもつ住居群で構成されていることになり、興味深い。

また、５世紀後半の第13号竪穴住居跡は、東辺7.6ｍ、北辺7.2ｍで、約54㎡の床面積をもち、県内の同時期の住居の中では傑出した規模である。平面形態は方形で、４本の主柱が平面形態と相似形をなして方形に配置される。ベッド状遺構はほぼ四周を巡るが、東辺中央部では途切れ、壁面に接して炭化物の充填した円形の掘り込みが認められた。この掘り込みの底面・側壁は熱変しており、設置場所・性格・竪穴住居の時期などから、カマ

正面の一部を研砥面とする砥石で、上端部・裏面は節理面である。研砥は不定方向から行なわれるが、正面左上方から右上方への擦過は認められない。流紋岩質溶結凝灰岩製。

## 4　小結

昭和59年度の調査で検出した遺構は、上述したように竪穴住居跡10棟、土壙19基、溝10条、河川跡のほか柱穴多数である。

竪穴住居は弥生時代中期前半（第10号竪穴住居跡）、中期後半（第９・11号竪穴住居跡）、後期後半（第８号竪穴住居跡）、後期終末（第18号竪穴住居跡）、古墳時代中期（第12･13号竪穴住居跡）の５時期のものが検出された。

平面形態は、中期のものはすべて円形（第９～11・14・15・17号竪穴住居跡）である。弥生時代の竪穴住居が、方形から円形へと移行する前期後半～末頃を平面形態変化の第一の画期とするならば、第二の画期として捉えられる、宇部市北迫遺跡・防府市大崎遺跡等のような、円形から再び方形へと変化する中期後半段階の方形住居は検出されていない。

後期後半～終末は、円形・方形の両形態が混在（第８・18号竪穴住居跡）し、椹野川以東の趨勢と一致する。５世紀後半の住居は、方形（第13号竪穴住居跡）・隅丸長方形（第12号竪穴住居跡）の方形系統２種がみられる。

床面積は、中期後半の住居が31～48㎡の規模をもち、特に中期後半の第９号竪穴住居跡は、48㎡と同時期の住居としては県内でも有数の規模をもつ。椹野川・佐波川・阿武川流域では、中期前半以降住居規模が大形化し、床面積が20㎡前後の一群に加えて、約45㎡前後のものが出現する。この大形化は中期後半にピークに達する[5]ことから、第９号住居跡も大形化した住居例と捉えることができよう。

後期後半の第８号竪穴住居跡は床面積約25.5㎡で、椹野川流域の同時期の方形住居の中でも最大の規模である。朝田墳墓群第Ⅱ地区[6]の各住居を含めると、椹野川流域は床面積約12～25㎡のもので占められ、右田・一丁田遺跡[7]、井上山遺跡[8]等、佐波川流域の方形住居群とほぼ同一規模をもつ住居群で構成されていることになり、興味深い。

また、５世紀後半の第13号竪穴住居跡は、東辺7.6ｍ、北辺7.2ｍで、約54㎡の床面積をもち、県内の同時期の住居の中では傑出した規模である。平面形態は方形で、４本の主柱が平面形態と相似形をなして方形に配置される。ベッド状遺構はほぼ四周を巡るが、東辺中央部では途切れ、壁面に接して炭化物の充填した円形の掘り込みが認められた。この掘り込みの底面・側壁は熱変しており、設置場所・性格・竪穴住居の時期などから、カマ

ドが出現する前段階の施設として興味深い。

またこの住居は火災住居で、床面上には桁および梁と考えられる4本の炭化材が方形に組まれたまま焼け落ちた状態で出土した。その周囲には棰木と推定される約20本の炭化材が床面中央に向かって放射状に検出されている。さらに、方形に組まれた桁・梁の内部の床面には、棰木に比べひとまわり太い炭化材が認められ、規模・検出位置・桁との重複関係から、主柱の一部と考えられた。桁・棰木の検出状況、住居の平面形態、主柱配置などから寄棟造屋根が想定され、竪穴住居の上屋構造を知る貴重な発見例となった。

土壙は、弥生時代中期中葉～終末のもので、平面形態は不整形のものが多い。竪穴住居に付設して営まれたものと考えられるが、相関関係は明らかでない。溝は、弥生時代中期後半～古墳時代初頭のもので、残存状態は悪く、遺物の出土量は極めて少ない。

河川跡は、調査区東端部で検出され、幅約2.6～4.5m、検出面からの深さ約55～80cmの規模をもち、南東から北西へ走行する。須恵器甕・坏身・土師器高坏などが出土しており、古墳時代後期～奈良時代にかけて機能していたものと考えられる。

出土遺物は、量的に多くはないが、注意しておきたい資料が数点出土した。

第9号竪穴住居跡から出土した一側縁加工のナイフ形石器は、対向する打面をもつ石核から作出された縦長剥片を素材とする優品である。メノウ製で、やや内彎する刃部には使用痕と考えられる剥落痕が認められる。竪穴住居の検出面が旧石器時代の遺物包含層であり、住居掘削時に同層から遊離した可能性も考えられる。近年、毛割遺跡[9]、堂道遺跡[10]や瑠璃光寺跡遺跡[11]からの報告例があるが、山口盆地内では旧石器自身の出土量が極めて少なく、当資料が大形の部類に入るナイフ形石器であることから、時期的にやや遡る可能性が考えられ、周辺での今後の資料の増加が期待される。

また同住居内からはジョッキ形土器の把手と思われるものも出土したが、県内では周東町河池遺跡[12]に出土例がみられるにすぎず、極めて貴重である。

第39号土壙は庄内新段階に位置づけられる。出土遺物には口縁部が「く」の字に大きく外反する壺、坏部の中位に稜をもって開く高坏に加え、搬入品かどうか明らかでないが底部が円盤状に突出した外来要素の強い土師器の甕または壺があり、注目しておきたい。

以上のように、遺跡保存地区の2年次目の調査では、多数の竪穴住居跡をはじめとして、土壙・溝・河川跡等を検出した。出土遺物にも注目すべき資料が少なくない。しかし住居の構造・集落の分布範囲等は必ずしも明らかになったわけではなく、住居の同時併存・土壙との相関関係を含めて、今後に残された大きな課題といえる。

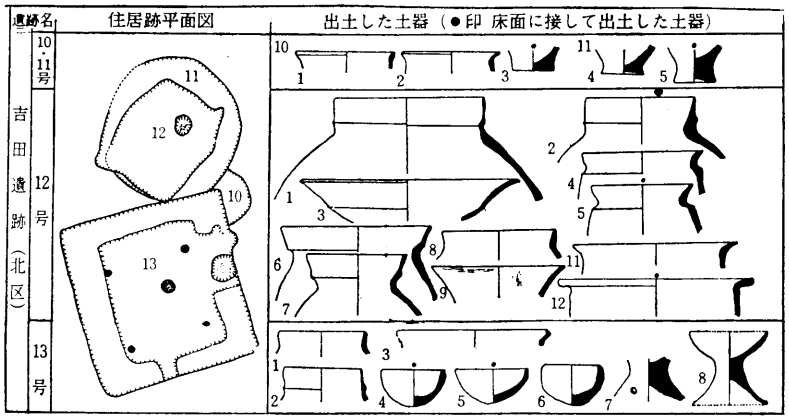
〔注〕

1）河村吉行「山口大学吉田構内遺跡保存地区の発掘調査（昭和57年度）」（『山口大学構内遺跡調査研究年報Ⅴ』、山口大学埋蔵文化財資料館、1986年）。

2）小野忠熙「北迫遺跡」（『宇部の遺跡』、宇部市教育委員会、1968年）。

3）山口県教育委員会・山陽都市開発株式会社「大崎遺跡」（『奥正権寺遺跡Ⅱ・大崎岡古墳群・大崎遺跡』、山口県埋蔵文化財調査報告第82集、1985年）。

4）第10～13号竪穴住居跡の出土遺物は、当埋蔵文化財資料館に該当資料が保管されておらず、遺物の記載は下記の文献に拠った。
小野忠熙・中野一人「山口」（『三世紀の考古学』下巻・三世紀の日本列島、学生社、1983年）。




5）河村吉行「考察―弥生時代竪穴住居跡の各属性について―」（前掲注1）文献所収）。

6）建設省山口工事事務所・山口県教育委員会「朝田墳墓群Ⅱ」（『朝田墳墓群Ⅱ・鴻ノ峰1号墳』、山口県埋蔵文化財調査報告第33集、1977年）。

7）山口県教育委員会「右田・一丁田遺跡」（『右田・一丁田遺跡、的場・宮の馬場遺跡、久米市遺跡』、山口県埋蔵文化財調査報告第19集、1973年）。

8）井上山遺跡発掘調査団『井上山』（1979年）。

9）山口市教育委員会・道川重機株式会社『毛割遺跡』（山口市埋蔵文化財調査報告第18集、1983年）。

10）山口市教育委員会・医療法人和同会『堂道遺跡』（山口市埋蔵文化財調査報告第24集、1987年）。

11）小田村宏「先史・原史」（『仁保の郷土史』、仁保の郷土史刊行会、1987年）。

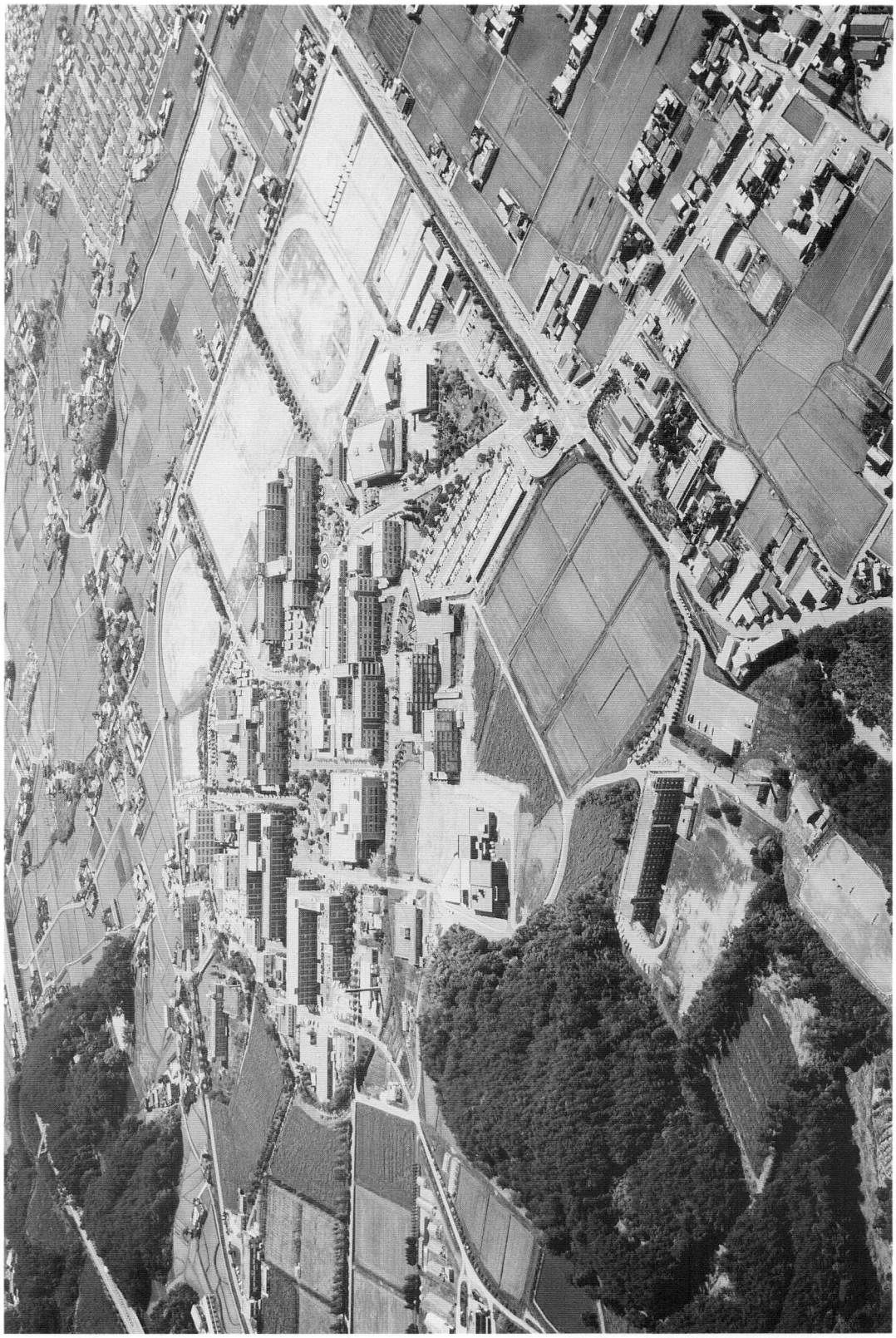
12）山陽自動車道建設に伴い、1987年に山口県埋蔵文化財センターによって発掘調査が実施されている。竪穴住居からの出土品で，報告書は1988年3月に刊行予定。

山口大学吉田構内遺跡保存地区の発掘調査(昭和59年度)(1)

(1) 調査区全景(北東から)

(2) 調査区全景(南西から)

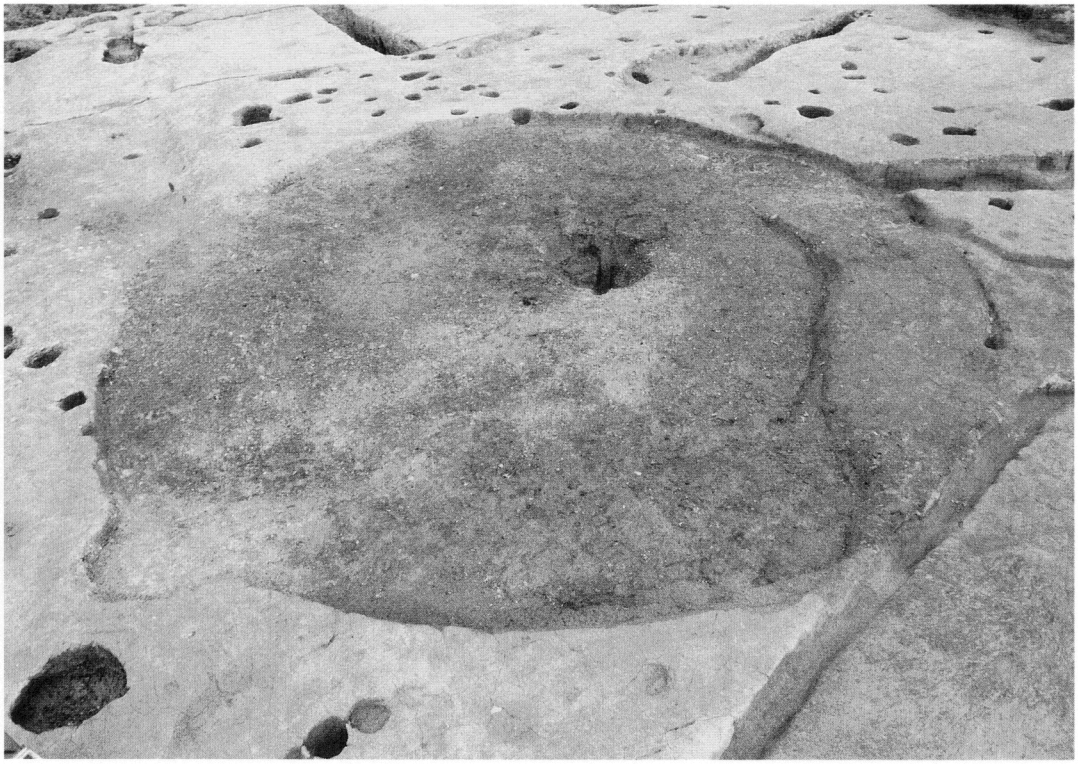
PL. 12



吉田構内全景（北西から）

(1) 第9号竪穴住居跡(東から)

(2) 第10～13号竪穴住居跡(南東から)



(1) 第11・12号竪穴住居跡(西から)

(2) 第13号竪穴住居跡(北西から)

(1) 第13号竪穴住居西隅の桁・梁材検出状況（南西から）



(2) 第13号竪穴住居跡東隅の桁・梁材検出状況（南から）



(3) 第13号竪穴住居跡の桁材縦断面（南東から）



(4) 第13号竪穴住居跡の桁材横断面（北東から）

山口大学吉田構内遺跡保存地区の発掘調査（昭和59年度）(4)

山口大学吉田構内遺跡保存地区の発掘調査（昭和59年度）(5)



(1) 第13号竪穴住居跡炉跡（北西から）



(2) 第13号竪穴住居跡炉跡（南東から）



(3) 第17号竪穴住居跡（北東から）

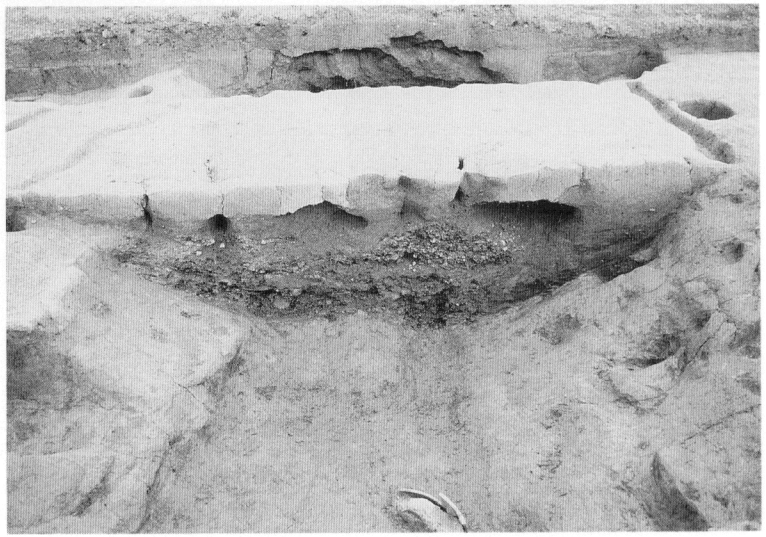


(4) 第18号竪穴住居跡（南西から）

山口大学吉田構内遺跡保存地区の発掘調査(昭和59年度)(6)

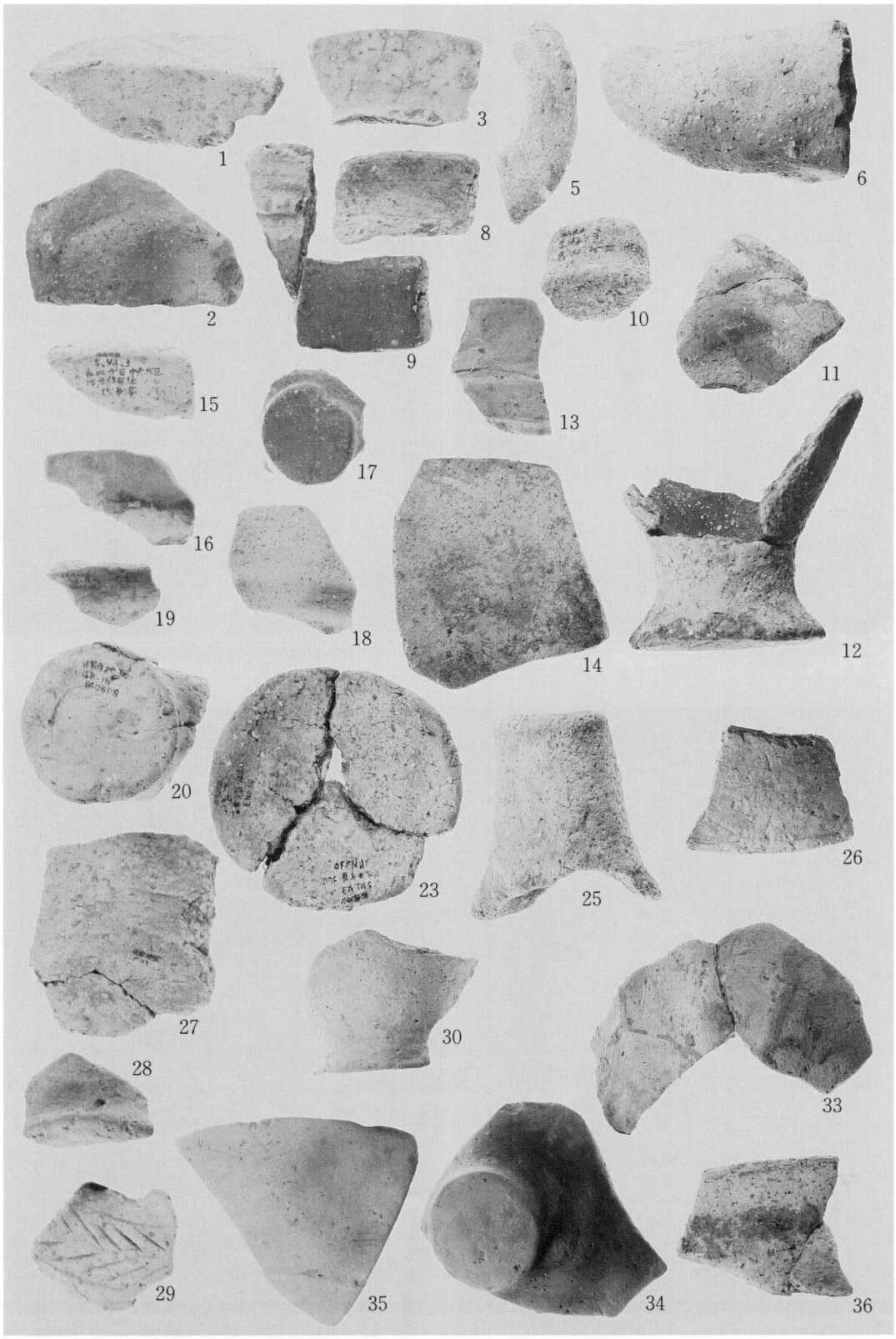
(1) 河川跡(南東から)

(2) 河川跡土層断面(南東から)

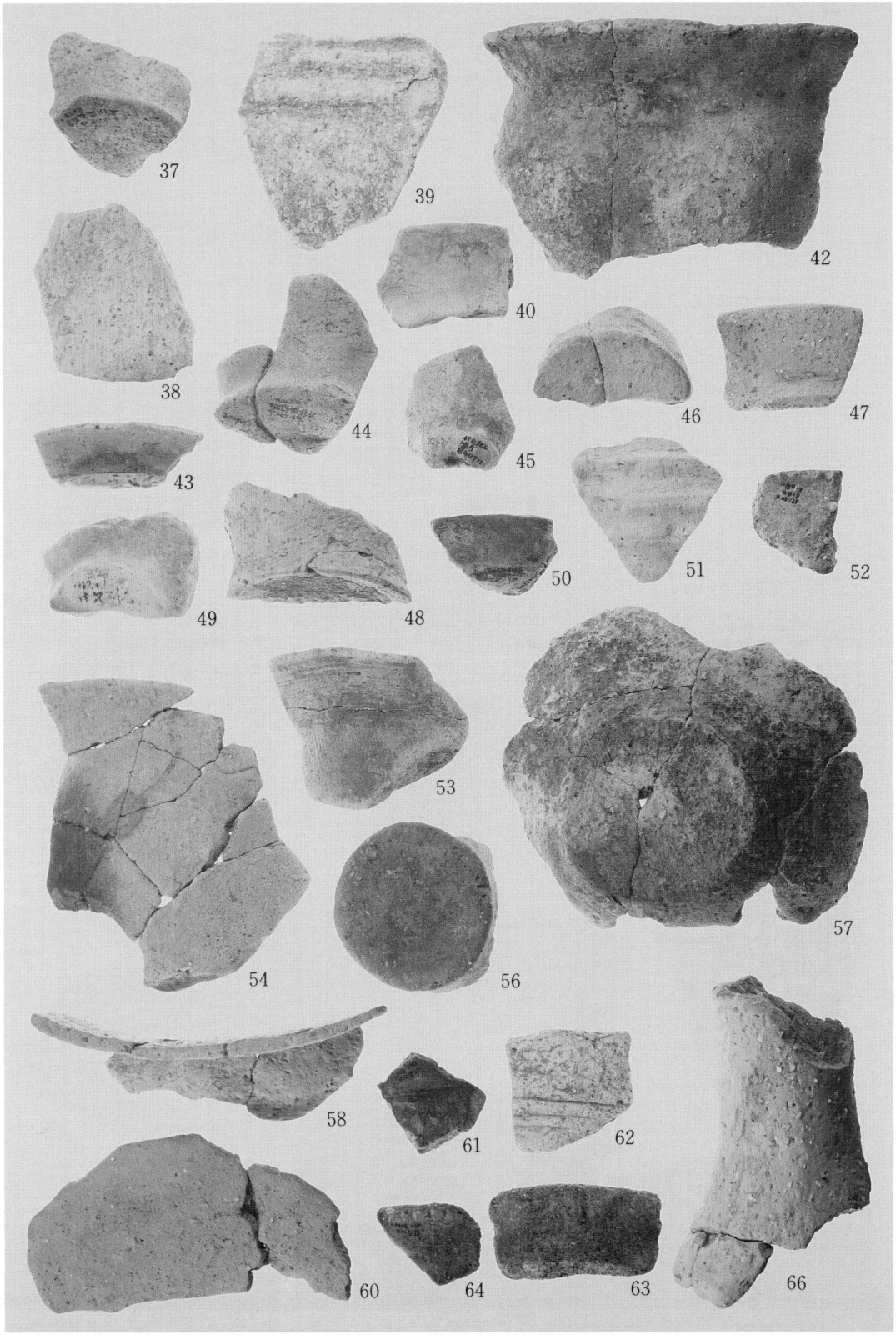


(3) 河川跡遺物出土状況(北東から)

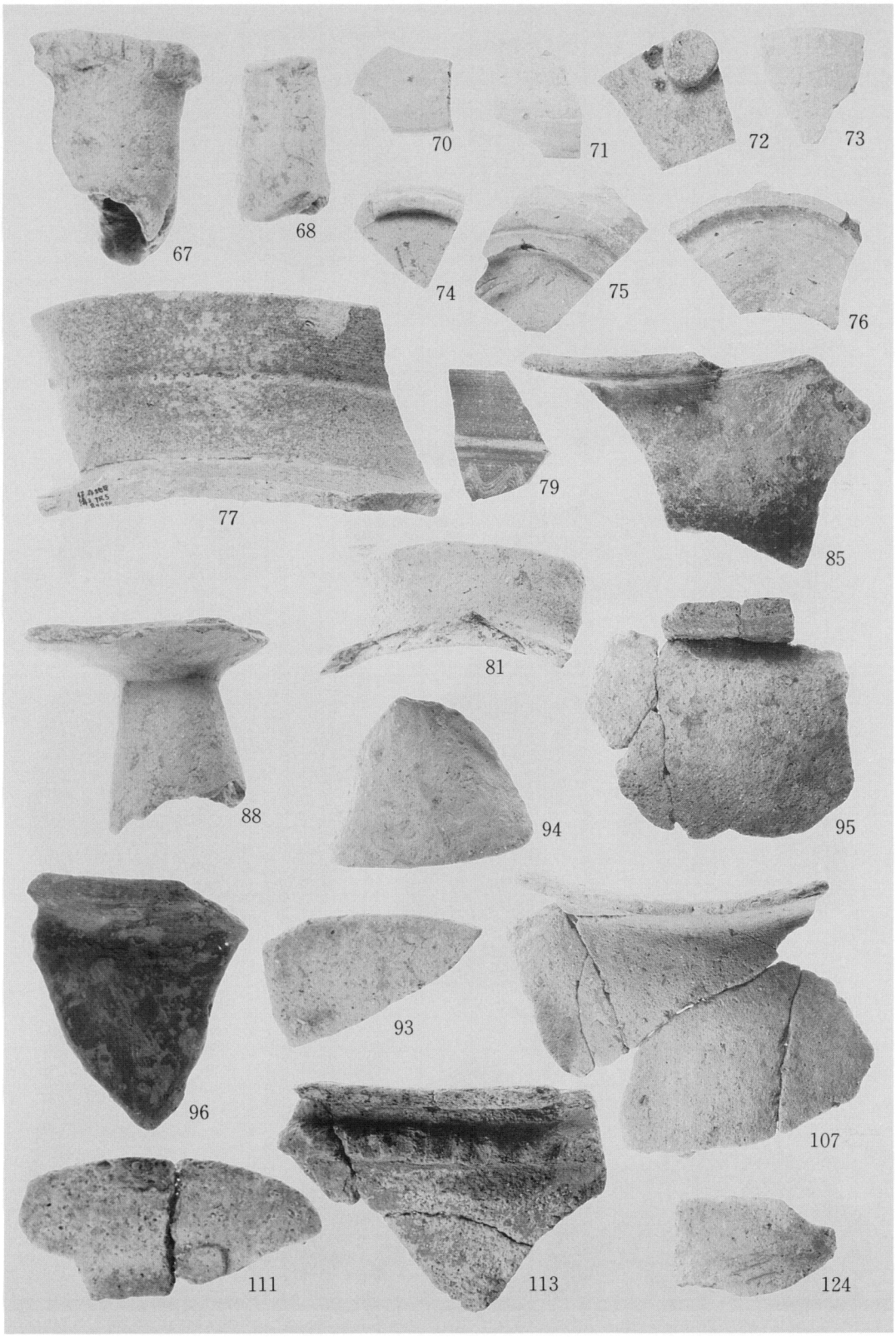
(4) 現地説明会風景


1
2
3
5
6
8
9
10
11
12
13
14
15
16
17
18
19
20
23
25
26
27
28
29
30
33
34
35
36

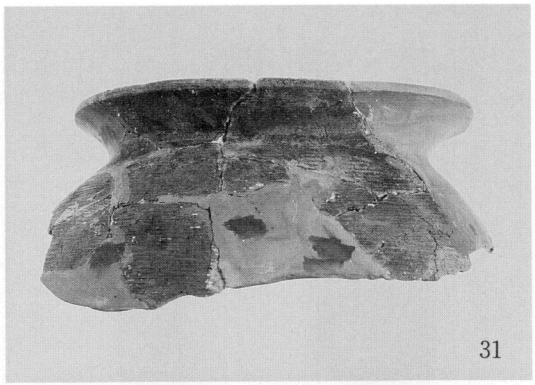
出 土 遺 物 (1)

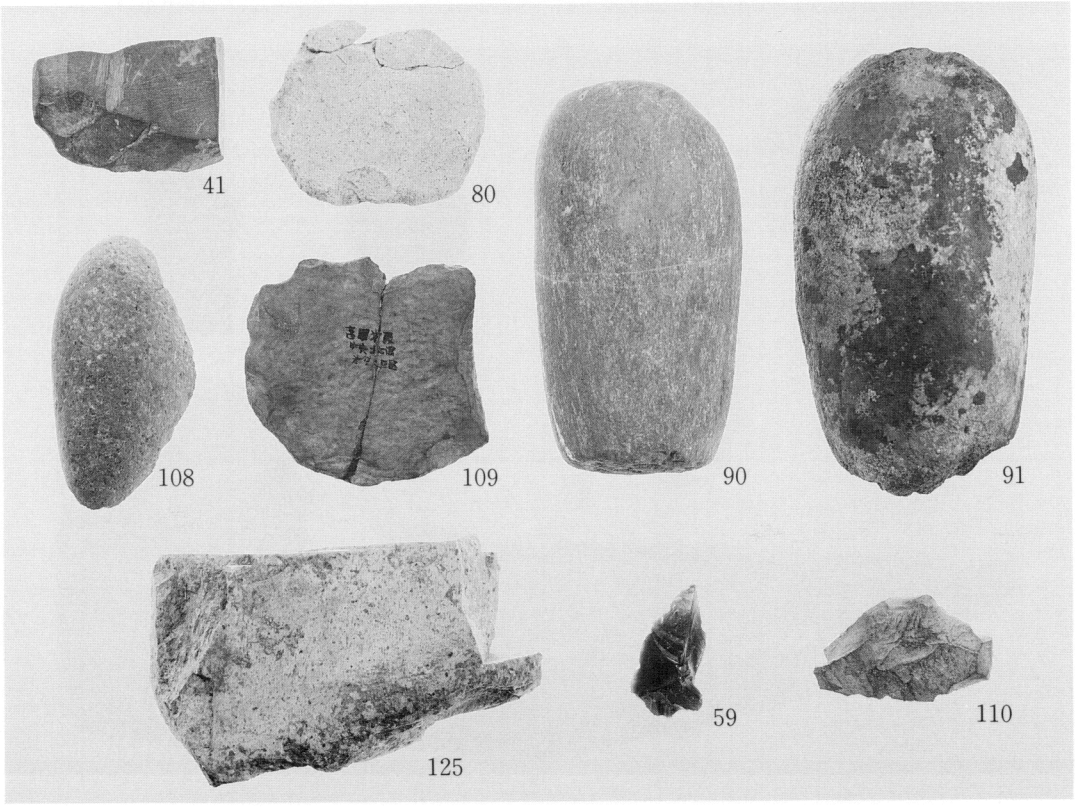

37
39
42
38
40
44
46
47
43
45
49
48
50
51
52
53
54
56
57
58
61
62
60
64
63
66

出 土 遺 物 (2)




出 土 遺 物 (3)






出 土 遺 物 (4)